

# 筑後西部第2地区遺跡群(Ⅲ)

福岡県筑後市大字常用・志所在

県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

筑後市文化財調査報告書

第27集

2000

筑後市教育委員会

# 筑後西部第2地区遺跡群(Ⅲ)

福岡県筑後市大字常用・志所在

県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

- ・常用野中遺跡
- ・志下<sup>しげ</sup>婦計<sup>むけ</sup>遺跡(第1・第2次調査)
- ・志西野々遺跡
- ・志前田遺跡

2000

筑後市教育委員会

## 序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稲耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより歴史を刻んできました。

筑後西部第2地区遺跡群の発掘調査は、県営担い手育成基盤整備事業に伴い、平成8年度より福岡県筑後川水系農地開発事務所の委託を受け、実施されたものであります。

この度報告する常用地区・志地区は筑後市の南部に位置し、縄文時代から近世にかけての幅広い時代の遺跡が確認されました。特に志地区からは、縄文時代早期の石組み炉を始めとする遺構・遺物が調査され、同時期の筑後市の歴史を語る上で、裏山遺跡と並ぶ重要な手がかりとなるものと考えられます。

発掘調査から報告書作成に至るまで、福岡県筑後川水系農地開発事務所の関係者、各関係機関、工事関係者、有識者各位には、多大なご協力とご援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。

本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただければ幸いです。

平成12年3月

筑後市教育委員会  
教育長 牟田口 和良

## 例 言

1. 本書は、県営担い手育成基盤整備事業西部第2地区に伴い、福岡県筑後川水系農地開発事務所の依頼を受けて、筑後市教育委員会が平成9年度に大字常用・志において実施した埋蔵文化財の掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は永見秀徳・立石真二・江崎貴浩・奥村太郎・末吉貴弥が制作し、常用野中遺跡、志下婦計遺跡第1次調査地点、志西野々遺跡、志前田遺跡の航空測量は写測エンジニアリング株式会社に委託した。浄書は立石が行った。
3. 本書使用の遺物実測図は立石・平塚あけみが制作し、浄書は立石が行った。
4. 本書使用の写真は主に永見・立石が撮影した。なお遺跡の気球写真は(前空中写真企画に依頼した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位はG.Nである。
6. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。また遺構の呼称については土壌をSK、溝状遺構をSD、柱穴をSP、不明遺構をSXと記号化した。
7. 本書に掲載した遺物の尺度は土製品は1/3、石製品は1/2を基本とする。
8. 本書に掲載した地図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。  
(Fig. 3: 承認番号 平 12九複、第68号)  
(Fig. 68: 承認番号 平 12九複、第69号)  
(Fig. 69: 承認番号 平 12九複、第70号)
9. 本書の執筆、編集は立石が行った。
10. 本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は、筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

# 本文目次

第1章	はじめに	
1.	調査に至る経過	1
2.	調査体制	4
第2章	位置と環境	
1.	自然環境	7
2.	歴史環境	7
第3章	遺構と遺物	
第1節	常用野中遺跡の調査	
1.	調査概要	13
2.	遺構と遺物	14
3.	小結	15
第2節	志下婦計遺跡第1次地区の調査	
1.	調査概要	17
2.	遺構と遺物	23
3.	小結	27
第3節	志下婦計遺跡第2次地区の調査	
1.	調査概要	29
2.	遺構と遺物	31
3.	小結	31
第4節	志西野々遺跡の調査	
1.	調査概要	33
2.	遺構と遺物	36
3.	小結	58
第5節	志前田遺跡の調査	
1.	調査概報	61
2.	遺構と遺物	63
3.	1号炉取り上げ作業	72
4.	小結	73
第4章	考察	
	筑後市内における縄文早期遺跡	75
付	遺物観察表	85

## 挿 図 目 次

Fig. 1	筑後西部第2地区遺跡群調査地点位置図1 (S=1/6,000)	2
Fig. 2	筑後西部第2地区遺跡群調査地点位置図2 (S=1/6,000)	3
Fig. 3	筑後西部第2地区遺跡群周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)	8
Fig. 4	常用野中遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)	13
Fig. 5	常用野中遺跡全体図 (S=1/200)	14
Fig. 6	SK01・SK02・SK03 (S=1/40)	15
Fig. 7	志下婦計遺跡第1次調査区周辺地形図 (S=1/2,500)	17
Fig. 8	志下婦計遺跡第1次調査区全体図 (S=1/200)	19
Fig. 9	SD01・02・03 (S=1/40)	22
Fig. 10	SD05・06 (S=1/40)	23
Fig. 11	SD07 (S=1/40)	24
Fig. 12	SD07出土遺物 (S=1/3)	24
Fig. 13	SD09 (S=1/40)	25
Fig. 14	SD09出土遺物 (S=1/3)	25
Fig. 15	SD10 (S=1/100・1/40)	26
Fig. 16	SK08出土遺物 (S=1/3)	26
Fig. 17	寛永通寶拓影 (S=1/1)	26
Fig. 18	志下婦計遺跡第2次調査区周辺地形図 (S=1/2,500)	29
Fig. 19	志下婦計遺跡第2次調査区全体図 (S=1/100)	30
Fig. 20	SD01 (S=1/40)	31
Fig. 21	周辺採集遺物 (S=1/3)	31
Fig. 22	志西野々遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)	33
Fig. 23	志西野々遺跡全体図1 (S=1/200)	34
Fig. 24	志西野々遺跡全体図2 (S=1/200)	35
Fig. 25	SD01 (S=1/40)	36
Fig. 26	SD01土層断面図 (S=1/40)	37
Fig. 27	SD01出土遺物 (S=1/3)	37
Fig. 28	SD005・007・008 (S=1/40)	38
Fig. 29	SD005・007出土遺物 (S=1/3・1/2)	39
Fig. 30	SE006 (S=1/40)	40
Fig. 31	SK009・010 (S=1/40)	40
Fig. 32	SK009出土遺物 (S=1/2)	40
Fig. 33	調査区東側土壌群 (石組み炉) (S=1/40)	42
Fig. 34	調査区東側土壌群 (石組み炉) 出土遺物 (S=1/3)	43
Fig. 35	SK080・107 (S=1/40)	44
Fig. 36	SK080・107出土遺物 (S=1/3・1/2)	44
Fig. 37	不明土壌・ピット群出土遺物 (S=1/3)	45

Fig.38	包含層遺物出土状況 1 (S=1/40)	46
Fig.39	包含層遺物出土状況 2 (S=1/40)	47
Fig.40	縄文土器 1 (山形文土器) (S=1/3)	48
Fig.41	縄文土器 2 (楕円文土器) (S=1/3)	49
Fig.42	縄文土器 3 (楕円門土器) (S=1/3)	50
Fig.43	縄文土器 4 (楕円文土器) (S=1/3)	51
Fig.44	縄文土器 5 (楕円文土器) (S=1/3)	52
Fig.45	縄文土器 6 (楕円文土器) (S=1/3)	53
Fig.46	縄文土器 7 (格子目文・捺糸文・無文土器) (S=1/3)	54
Fig.47	縄文土器 8 (その他) (S=1/3)	55
Fig.48	「壺」型土器 (S=1/3)	56
Fig.49	出土石製品 1 (S=1/2)	57
Fig.50	出土石製品 2 (S=1/2)	58
Fig.51	その他の出土遺物 (S=1/3)	59
Fig.52	縄文遺物包含層位置図 (S=1/2,500)	59
Fig.53	志前田遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)	61
Fig.54	志前田遺跡全体図 (S=1/300)	62
Fig.55	SD01 (S=1/40)	63
Fig.56	SK02 (S=1/40)	64
Fig.57	W 1 区 (S=1/40)	64
Fig.58	1号炉 (S104) (S=1/20)	65
Fig.59	W 1 区焼石出土土壌 (S=1/20)	66
Fig.60	W 1 区出土遺物 (S=1/3)	66
Fig.61	W 2 区 (S=1/40)	67
Fig.62	2号炉 (S205) (S=1/20)	67
Fig.63	W 2 区焼石出土土壌 1 (S=1/20)	68
Fig.64	W 2 区焼石出土土壌 2 (S=1/20)	69
Fig.65	W 2 区出土遺物 (S=1/3・1/2)	71
Fig.66	その他の出土遺物 1 (S=1/3)	71
Fig.67	その他の出土遺物 2 (S=1/2)	72
Fig.68	筑後市周辺の縄文早期 (石組炉・押型文土器出土) 遺跡位置図 1 (S=1/50,000)	76
Fig.69	筑後市周辺の縄文早期 (石組炉・押型文土器出土) 遺跡位置図 2 (S=1/50,000)	77
Fig.70	裏山遺跡 (上北島裏山遺跡第2次調査) 出土遺物 (S=1/3・『筑後市史』より転載)	78
Fig.71	大地田遺跡出土遺物 (S=1/2・報告書より転載)	79
Fig.72	新溝丸田遺跡出土遺物 (S=1/3・報告書より転載)	79
Fig.73	鶴田岸添遺跡第2次調査区焼石出土土壌 (S=1/15・報告書より改変・転載)	79
Fig.74	久恵中野遺跡B区 (S=1/600)	80
Fig.75	久恵中野遺跡B区石組み炉 (S=1/20)	81
Fig.76	前津中ノ王遺跡第2次調査区出土遺物 (S=1/3・報告書より転載)	82
Fig.77	筑後市内縄文早期遺跡位置模式図	83

# 図 版 目 次

## 図版扉

- 常用野中遺跡全景 (上から)
- PL.1  
常用野中遺跡 SK01土層断面 (北から)  
常用野中遺跡 SK01完掘状況 (西から)
- PL.2  
常用野中遺跡 SK02土層断面 (北から)  
常用野中遺跡 SK02完掘状況 (西から)
- PL.3  
常用野中遺跡 SK03土層断面 (北から)  
常用野中遺跡 SK03完掘状況 (西から)
- PL.4  
志下婦計遺跡第1次調査区 全景 (上から)  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD01・02・03 (上から)
- PL.5  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD01土層断面 (西から)  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD01完掘状況 (西から)
- PL.6  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD02土層断面 (西から)  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD02完掘状況 (西から)
- PL.7  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD03土層断面 (西から)  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD03完掘状況 (西から)
- PL.8  
志下婦計遺跡第1次調査区  
SD05・06完掘状況 (北から)  
志下婦計遺跡第1次調査区  
SD07・SK08完掘状況 (北から)
- PL.9  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD09完掘状況 (北から)  
志下婦計遺跡第1次調査区 SD10完掘状況 (西から)
- PL.10  
志下婦計遺跡第1次調査区出土遺物
- PL.11  
志下婦計遺跡第2次調査区全景 (東から)  
志下婦計遺跡第2次調査区周辺採集遺物
- PL.12  
志西野々遺跡 全景 (上から)  
志西野々遺跡 全景 (東から)  
志西野々遺跡 西側調査区全景 (上から)
- PL.13  
志西野々遺跡SD01土層断面 (北から)
- 志西野々遺跡SD01完掘状況 (北から)
- PL.14  
志西野々遺跡東側調査区全景 (上から)  
志西野々遺跡縄文遺物包含層 (上から)
- PL.15  
志西野々遺跡SD005土層断面 (北から)  
志西野々遺跡SD007土層断面 (北から)
- PL.16  
志西野々遺跡SE006完掘状況 (北から)  
志西野々遺跡SK009完掘状況 (北から)
- PL.17  
志西野々遺跡出土遺物 (1)
- PL.18  
志西野々遺跡出土遺物 (2)
- PL.19  
志西野々遺跡出土遺物 (3)
- PL.20  
志西野々遺跡出土遺物 (4)
- PL.21  
志西野々遺跡出土遺物 (5)
- PL.22  
志西野々遺跡出土遺物 (6)
- PL.23  
志西野々遺跡出土遺物 (7)
- PL.24  
志前田遺跡SD01土層断面 (南から)  
志前田遺跡1号炉 (SK104) 石材投入状況 (南から)
- PL.25  
志前田遺跡1号炉 (SK104) 完掘状況 (南東から)  
志前田遺跡2号炉 (SK205) 完掘状況 (南から)
- PL.26  
志前田遺跡出土遺物
- PL.27  
志前田遺跡1号炉取り上げ作業状況①  
志前田遺跡1号炉取り上げ作業状況②
- PL.28  
志前田遺跡1号炉取り上げ作業状況③  
志前田遺跡1号炉取り上げ作業状況④
- PL.29  
志前田遺跡1号炉取り上げ作業状況⑤  
志前田遺跡1号炉取り上げ作業状況⑥



# 第1章 はじめに

## 1 調査に至る経過

筑後市の南西部は矢部川により形成された低位段丘と中積平野が広がり、農業を中心とした産業が営まれている。この地域は稲、麦を中心とした二毛作が行われる穀倉地帯であるが、近年の農業構造の変化に伴い蔬菜ハウス栽培が導入され、農業経営の多様化が進んでいる。しかし、この地域特有の用排水兼用のクリークが迷走するために、圃場の地下水位が高く排水不良なことに加え、道路も狭小かつ未整備なため、農業機械の導入が困難な状況であった。

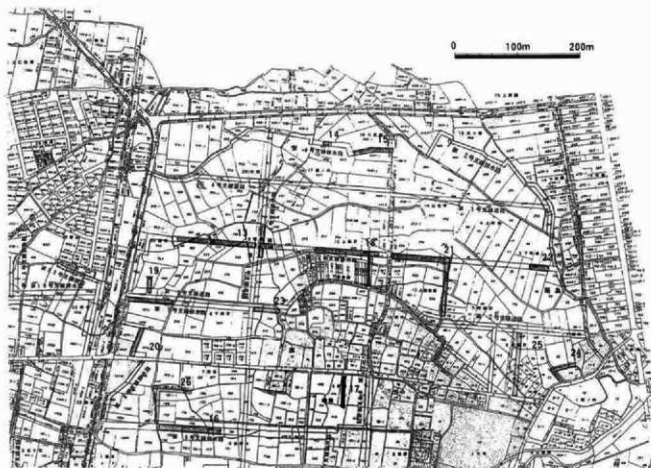
これに対し、農業の近代化、合理化による農業所得の増大を目的として、県営担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区計画が、福岡県筑後川水系農地開発事務所（以後「甲」とする）により行われることとなった。事業は平成6年度に全体計画が実施され、平成7年度に県営事業として採択された。事業は筑後市大字常用（7工区の一部と9工区）、津島（7工区の一部と8・11工区）、志（11・12工区と13工区の一部）、尾島（13工区の一部）山門郡瀬高町大字本郷（1～6・14工区）におよび、総面積157haの田畑を対象に行われることとなった。

平成7年、「甲」より筑後市教育委員会社会教育課社会教育係（現文化係、以後「乙」とする）に対し、埋蔵文化財に関する申請があり、「乙」は麦の収穫後となる平成8年6月より平成8年度事業対象地域（7工区）において、止むを得ず削平を受ける部分に対し試掘調査を行った。その結果、弥生時代を中心とする遺跡の存在が確認された。この結果を受け、「甲」「乙」両者は協議を行い、予算、日程を調整した後発掘調査を行うこととなった。この間も試掘調査は引き続き行われた。調査は常用日田行遺跡第2次調査の遅れから、平成9年5月に終了した。

平成9年4月、「甲」より「乙」に対し、平成9年度対象地域（8～13工区）に対する埋蔵文化財に関する申請が行われた。「乙」は道路及び削平を受ける部分に対し試掘可能な地点から随時これを行った。その結果、津島地区においては弥生時代を中心とする遺跡を、そのほかの地点については中世から近世にかけての遺跡の存在を確認した。この結果を受け両者は協議を行い、発掘調査を実施することとなった。途中、津島北石伏遺跡・津島皿ヶ町遺跡の調査の遅れに伴い日程を再度協議し、平成10年4月、調査を終了した。平成10年4月、「甲」より「乙」に対し、10年度事業対象地域に関する埋蔵文化財の問い合わせがなされた。事業の対象地域は筑後市大字水田で、15工区として新たに圃場整備事業に加わった地域である。これに対し「乙」は試掘調査を行い、弥生時代を中心とするものと、中世から近世を中心とする遺跡の存在を確認した。この結果を受け両者は協議を行い、止むを得ず削平を受ける部分について発掘調査を行った。調査は平成10年11月に終了した。



Fig. 1 筑後西部第2地区道跡群調査地点位置図1 (S=1/6,000)



※図中の数字は表中の番号に対応する。

Fig. 2 筑後西部第2地区遺跡群調査地点位置図 (S=1/6,000)

Tab.1 西部第2地区遺跡群調査地点一覧表

本調査区調査地点一覧(調査期別)					
番号	調査地点名	調査期間	遺構	遺物	
1	本郷地区遺跡 A-1区	1986年5月-1986年7月	溝・土塀・ピット	弥生土器(鉄器)	
2	本郷地区遺跡 A-2区		ピット		
3	本郷地区遺跡 B区		掘立式住居・掘立式遺構・土塀・ピット	弥生土器(鉄器)	
4	本郷地区遺跡 C区		溝・ピット	土師器・陶磁器	
5	本郷地区遺跡 D区		掘立式住居・掘立式遺構・土塀・ピット	弥生土器(中期-後期)・小倉(古墳前期-中期)	
6	本郷地区遺跡	1986年2月	土塀・ピット	小倉・鉄(古墳前期)	
平成8年度 調査地点一覧					
番号	調査地点名	調査期間	遺構	遺物	
1	津高所(比定遺跡)第1次調査	1986年7月	溝		
2	菅川(比定遺跡)第1次調査	1986年2月-1986年12月	溝・掘立式住居・土塀・ピット	整理作業中	
3	菅川(比定遺跡)第2次調査	1986年12月	溝・土塀・ピット	整理作業中	
4	菅川(比定遺跡)第3次調査	1986年12月-1987年3月	溝・土塀・ピット	整理作業中	
5	菅川(比定遺跡)第3次調査	1987年1月-1987年3月	(整理作業中)	整理作業中	
平成10年度 調査地点一覧					
番号	調査地点名	調査期間	遺構	遺物	
6	菅川(比定遺跡)	1987年5月-1987年6月	溝・土塀・ピット	整理作業中	
7	津高所(比定遺跡)	1987年7月-1987年9月	掘立式住居・掘立式遺構・掘立式土塀(鉄器)	弥生土器(鉄器)	
8	津高所(比定遺跡)	1987年9月-1987年10月	溝・土塀・ピット	弥生土器(鉄器)・絆土・陶磁器(古墳前期)	
9	津高所(比定遺跡)第2次調査	1987年10月	溝・土塀	弥生土器(鉄器)・絆土・土師器(古墳前期)	
10	津高所(比定遺跡)	1987年10月-1987年11月	土塀	弥生土器(鉄器)・絆土・土師器(古墳前期)	
11	菅野(比定遺跡)	1987年10月	溝・土塀	整理作業中	
12	菅野(比定遺跡)	1987年10月	溝・ピット	整理作業中	
13	志野(比定遺跡)	1987年10月-1987年11月	高土次・溝・ピット	整理作業中	
14	志野(比定遺跡)	1987年11月	溝	整理作業中	
15	志野(比定遺跡)	1987年11月	溝・土塀	整理作業中	
16	志野(比定遺跡)	1987年11月-1987年12月	溝・土塀・ピット	縄文土器(前期)・土師器(中世-近世)	
17	志野(比定遺跡)	1987年11月-1988年3月	土塀(調査区外より石組み)	縄文土器(前期) 調査区外より	
18	志野(比定遺跡)第1次調査	1987年11月-1987年12月	溝・土塀・ピット	整理作業中	
19	志野(比定遺跡)第2次調査	1987年12月	溝・土塀	陶磁器(古墳)	
20	志野(比定遺跡)	1987年12月	土塀・ピット	整理作業中	
21	志野(比定遺跡)第2次調査	1988年1月-1988年2月	溝・土塀・ピット	整理作業中	
22	尾島(比定遺跡)	1988年2月	溝・ピット	整理作業中	
23	志野(比定遺跡)第2次調査	1988年2月-1988年2月	溝・ピット	整理作業中	
24	尾島(比定遺跡)	1988年3月-1988年4月	溝・土塀	整理作業中	
25	尾島(比定遺跡)	1988年3月	溝・土塀・ピット	整理作業中	
26	志野(比定遺跡)	1988年3月	溝・ピット	整理作業中	
平成10年度 調査地点一覧					
番号	調査地点名	調査期間	遺構	遺物	
27	志野(比定遺跡)第1次調査	1988年7月-1988年9月	掘立式住居・溝・土塀・ピット弥生土器	陶磁器(整理作業中)	
28	志野(比定遺跡)第1次調査	1988年9月-1988年10月	溝・ピット	整理作業中	
29	志野(比定遺跡)	1988年9月-1988年10月	溝・ピット	整理作業中	
30	志野(比定遺跡)第2次調査	1988年10月-1988年11月	溝・土塀・ピット	弥生土器・陶磁器(整理作業中)	
31	志野(比定遺跡)第2次調査	1988年11月	高土次・溝・土塀・ピット	整理作業中	
32	志野(比定遺跡)第2次調査	1988年12月	遺物	整理(中期)	

## 2 調査体制

各年度の調査組織の体制は、以下のとおりである。

### 〈平成8年度〉

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	森田 基之				
教育部長	津留 忠義				
社会教育課長	山口 逸郎				
社会教育係長	本村 正晴				
	永見 秀徳	小林 勇作	田中 剛	柴田 剛 (嘱託)	
調査補助	野田 洋子				
調査作業	地元有志				
整理補助員	平塚 あけみ				
整理作業	江藤 玲子	野間口靖子	馬場 敦子		
	湊 まど香				
調査・整理作業協力	江崎 貴浩	奥村 太郎	末吉 貴弥	(現 川崎町教育委員会)	

### 〈平成9年度〉

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	森田 基之				
教育部長	津留 忠義				
社会教育課長	山口 逸郎				
社会教育係長	田中 清道				
	永見 秀徳	小林 勇作	田中 剛	上村 英士 (6月～)	
嘱託	柴田 剛	上村 英士 (5月)	立石 真二 (8月～)		
調査作業	地元有志				
整理補助員	平塚 あけみ				
整理作業	江藤 玲子	野間口 靖子	馬場 敦子	湊 まど香	
調査・整理作業協力	江崎 貴浩	奥村 太郎	末吉 貴弥	(現 川崎町教育委員会)	

### 〈平成10年度〉

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	森田 基之				
教育部長	津留 忠義				
社会教育課長	山口 逸郎				
文化係長	田中 清道				
	永見 秀徳	小林 勇作	田中 剛	上村 英士	
嘱託	柴田 剛	立石 真二			
調査作業	地元有志				

整理補助員	平塚 あけみ	江藤 玲子			
整理作業	野口 晴香	野間口 靖子	馬場 敦子	湯川 琴美	
調査・整理作業補助	奥村 太郎	末吉 貴弥	(現 川崎町教育委員会)		

〈平成11年度〉

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	幸田口 和良				
教育部長	下川 雅晴				
社会教育課長	庄村 國義				
文化係長	田中 徹一				
	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士		
嘱託	柴田 剛	立石 真二	(7月～)		
整理補助員	平塚 あけみ				
整理作業	野口 晴香	野間口 靖子	馬場 敦子	湯川 琴美	

※ 機構改革に伴い、社会教育係から文化係へと改称。

なお、今回報告の遺跡の調査に際し、福岡県筑後川水系農地開発事務所、各工事関係業者より多大なご協力を頂いた。また、下記の方々からは調査・整理作業に関してご教示、ご指導を賜わった。記して謝意を表したい(順不同、敬称略)。

木下 修(福岡県教育委員会)、小田 和利(福岡県教育庁南筑後教育事務所)、横田 義章(福岡県立九州歴史資料館学芸二課長)、西 健一郎(九州大学文学部助手)、富田 絃一(熊本市立熊本博物館副館長)、富永 直樹、神保 公久(久留米市教育委員会)、大塚 恵治(八女市教育委員会)、永田 寧(立花町教育委員会)、塚本 映子(三瀬町教育委員会)、杉内 郷、荻村 昇二(筑穂町教育委員会)、松浦 宇哲(碓井町教育委員会)、末吉 貴弥(川崎町教育委員会)、赤村教育委員会

※ 『筑後西部第2地区遺跡群(1)』の周辺遺跡分布図中に記入漏れの遺跡が3地点ほど確認された。この場を借りて謝罪するとともに、今回のもので訂正とさせて頂きたい。

【参考文献】

田中 徹信	【本郷地区遺跡】	熊高町教育委員会 第14集 1997
田中 徹信	【熊高地区遺跡群(Ⅱ)】	熊高町教育委員会 第15集 1998
立石 真二・小林勇作	【筑後西部第2地区遺跡群(1)】	筑後市教育委員会 第21集 1999
永見 秀徳	【筑後西部第2地区遺跡群(Ⅱ)】	筑後市教育委員会 第26集 2000

1950

## 第2章 位置と環境

### 1 自然環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中心部に位置し、北は久留米市、三浦郡三浦町、東に八女市、八女郡広川町、西に三浦郡大木町、南に山門郡瀬高町、同三橋町が隣接する。

地形的にはおおよそ3地域に大別される。北部は耳納山地より派生した八女丘陵が東西に連なっており、その南側を前津丘陵が併走する。この八女丘陵を最頂点として起伏に富んだ丘陵地帯が広がっている。市の南部には県下第3位の矢部川が西流する。市の東部はこの矢部川により形成された扇状地・低位段丘が、西部には標高5m前後の三角州状低湿地が広がり、後者にはクリークが発達していた。

気候は内陸性で、夏と冬の寒暖の差は大きく、降水量も不安定である。このため市内を流れる河川には多くの用水路が接続する。しかしながら、当地は米と麦の二毛作が盛んな穀倉地帯であり、い草の栽培も行われている。また、近年では野菜のハウス栽培も盛んである。

西部第2地区遺跡群は、標高15～5mの扇状地・低位段丘から三角州状低湿地に変わる地域にまたがっている。また、古代より続く開墾により、豊かな田園が広がる地域でもある。

### 2 歴史環境

筑後西部第2地区遺跡群の周辺には、古くから人々の生活の痕跡をかいま見ることができる。

矢部川北岸の八女市から筑後市東部にかけての扇状地には、縄文時代早期の押型土器（主に早期後半）や同時代のものと思われる石組みみ、落し穴などが多数見つかっている（Fig.68・69）。筑後市内では当遺跡群の北側に位置する上北島の裏山遺跡の存在が早くから知られていたが、近年の相次ぐ圃場整備事業に伴い、当遺跡群の志地区や筑後東部地区遺跡群からも、同時期のものと思われる遺構、遺物が発見されている。

縄文時代前期から後期にかけての明確な遺跡は、現時点では確認されていない。しかしながら、筑後市の中央部に位置する長崎坊田遺跡からは、野口タイプおよび管壺土器の破片が確認されている。また、これまでも市内各地で縄文時代の石器が確認されており、今後の資料のさらなる増加が期待される。

縄文時代晩期以降、市内の遺跡は市の南部を中心として増加する傾向にある。縄文晩期から弥生前期にかけては常用遺跡群、中期には水田遺跡群、古島榎崎遺跡、蔵数森ノ木遺跡（古墳時代まで展開する集落遺跡）、後期には常用梅島遺跡や田佛遺跡（古墳時代まで展開する集落遺跡）、鶴田遺跡群、終末期には狐塚遺跡などを見ることができる。西部第2遺跡群の北西部には前述の常用遺跡群の一部と水田遺跡群が、南西部には後期から終末期にかけての津島遺跡群が存在する。

古墳時代になると、この地域の国造である筑紫君の一族の活動に伴い、彼等の奥津城である八女古墳群や当時の遺跡が、八女丘陵を中心として展開する。市内の該当する遺跡としては、蔵数森ノ木遺跡、田佛遺跡、欠塚古墳、瑞王寺古墳（消滅）等がある。



(承認番号 平12九報、第68号)

- |              |               |               |             |            |
|--------------|---------------|---------------|-------------|------------|
| 1 吉島樺崎遺跡     | 2 榎崎遺跡        | 3 下北島久清遺跡     | 4 下北島久平遺跡   | 5 和東式遺跡    |
| 6 下北島樺引遺跡    | 7 井原口遺跡       | 8 長尾遺跡        | 9 上北島花畑遺跡   | 10 上北島前田遺跡 |
| 11 上北島平塚遺跡   | 12 折地長岡寺遺跡    | 13 水田伊勢ノ島遺跡   | 14 水田正吹遺跡   | 15 水田下坂町遺跡 |
| 16 水田村ノ元遺跡   | 17 水田山伏遺跡     | 18 (上北島) 裏山遺跡 | 19 鶴田野田遺跡   | 20 鶴田清代遺跡  |
| 21 鶴田東大坪遺跡   | 22 新津大丸遺跡     | 23 鶴田西畑遺跡     | 24 鶴田西田遺跡   | 25 鶴田此津遺跡  |
| 26 新津松原遺跡    | 27 新津丸大遺跡     | 28 鶴田輪原遺跡     | 29 鶴田大南遺跡   | 30 鶴田前田遺跡  |
| 31 久慈野北遺跡    | 32 久慈岸ノ下遺跡    | 33 鶴田岸田遺跡     | 34 鶴田中市ノ坂遺跡 | 35 鶴田市ノ坂遺跡 |
| 36 (常用) 鶴島遺跡 | 37 常用ビンセ田遺跡   | 38 水田下平雲石遺跡   | 39 水田上平雲石遺跡 | 40 水田上仁良遺跡 |
| 41 常用日田行遺跡   | 42 常用(北) 長田遺跡 | 43 常用ニラハ遺跡    | 44 常用利根遺跡   | 45 常用野ノ下遺跡 |
| 46 津島南養生遺跡   | 47 常用南原遺跡     | 48 津島北石伏遺跡    | 49 津島畑ノ町遺跡  | 50 志敷ノ内遺跡  |
| 51 志八反田遺跡    | 52 北野浜遺跡      | 53 志上峠遺跡      | 54 尾島下町遺跡   | 55 尾島東結遺跡  |
| 56 尾島前田遺跡    | 57 志下峠遺跡      | 58 常用野中遺跡     | 59 志西田遺跡    | 60 志西野ノ遺跡  |
| 61 志前田遺跡     | 62 志川遺跡       | 63 津島北光田遺跡    | 64 津島西畑遺跡   |            |

Fig.3 筑後西部第2地区遺跡群周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)



古代においては、市の中央部を縦断するような形で古代西海道が存在する（調査地点は北より山ノ井川口遺跡、鶴田木屋ノ角遺跡、鶴田中市ノ塚遺跡がある）。また、それに伴うと考えられる施設や集落遺跡が市の中央部において確認されている（羽犬塚中道遺跡など）。また、古代から中世にかけては水田庄、広川庄に伴うと見られる居館的遺構が存在する。近世に入るとそれまでに街道沿いに発達していた宿場町や有力寺社の下に発達していた在郷町等が整備された。当遺跡群の東側に位置する尾島集落は街道沿いの宿場町として、北側に位置する水田集落は中世の水田荘を中心として栄えてきた在郷町である。また、これまでの街道を整備して、薩摩街道（坊ノ津街道とも）が開かれた。しかしながら、当遺跡群内においては古代以降の遺構の数は急速に減少し、中・近世ごろの水路が確認されるにすぎない状況である。

【参考文献】

若崎 光	『高山遺跡 調査概報』	1966	筑後市教育委員会
小田 富士雄	『狐塚遺跡』	1970	筑後市教育委員会
川道 昭人	『臨王寺古墳』	筑後市文化財調査報告書 第3集	1984 筑後市教育委員会
川道 昭人	『田原遺跡』	筑後市文化財調査報告書 第5集	1987 筑後市教育委員会
佐々木 隆彦・他	『蔵敷遺跡群（高ノ水遺跡）』	筑後市文化財調査報告書 第6集	1990 筑後市教育委員会
水見 秀徳	『尾島遺跡』	1992	筑後市教育委員会
佐田 茂・他	『大塚古墳』	筑後市文化財調査報告書 第8集	1993 筑後市教育委員会
筑後市教育委員会・編	『筑後東部地区遺跡群（Ⅰ）』	筑後市文化財調査報告書 第11集	1994 筑後市教育委員会
筑後市教育委員会・編	『筑後東部地区遺跡群（Ⅱ）』	筑後市文化財調査報告書 第12集	1995 筑後市教育委員会
筑後市文庫さん委員会・編	『筑後市史』	1998	筑後市文庫さん委員会
小林 勇作	『ちくご遺跡だより』 Vol.4	筑後市文化財調査報告書	1998 筑後市教育委員会
立石 真二・小林勇作	『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅰ）』	筑後市文化財調査報告書 第21集	1999 筑後市教育委員会
小林 勇作	『筑崎坊田遺跡』	筑後市文化財調査報告書 第23集	1999 筑後市教育委員会
小林 勇作	『ちくご遺跡だより』 Vol.10	1999	筑後市教育委員会
水見 秀徳	『ちくご遺跡だより』 Vol.11	1999	筑後市教育委員会
柴田 剛	『ちくご遺跡だより』 Vol.12	1999	筑後市教育委員会
上村 義士	『ちくご遺跡だより』 Vol.13	1999	筑後市教育委員会
小林 勇作	『ちくご遺跡だより』 Vol.14	1999	筑後市教育委員会
水見 秀徳	『ちくご遺跡だより』 Vol.15	1999	筑後市教育委員会
水見 秀徳	『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅱ）』	筑後市文化財調査報告書 第26集	2000 筑後市教育委員会



### 第3章 遺構と遺物



## 第1節 常用野中遺跡の調査

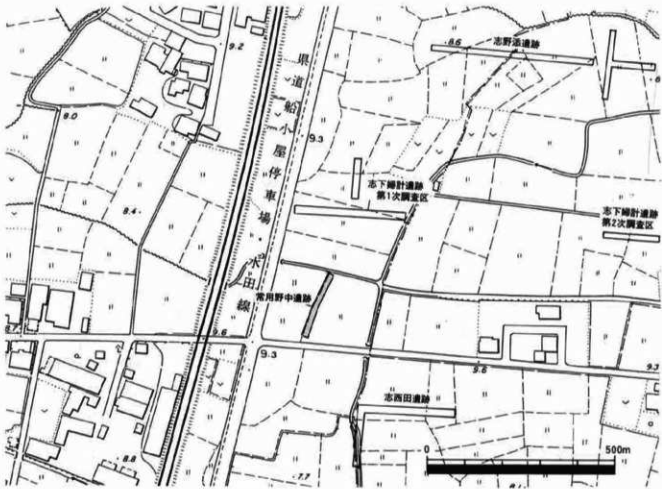


Fig.4 常用野中遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)

### 1 調査概要

常用野中遺跡は、筑後市大字常用字野中に位置する。標高約8mの低位段丘上に位置し、調査前は水田・麦畑などの耕作地であった。調査は第8号支線排水路の建設にともない掘削を受ける部分について行われた。調査対象面積は180㎡である。調査ははじめ、重機による遺構面の確認から行い、表土除去後、暗褐色土を10cmほど掘り下げたところでこれを確認した。調査期間は1997年12月1日～同26日、志下婦計遺跡第1次調査と併せて行われた。

## 2 遺構と遺物

常用野中遺跡では、小型の楕円形土壌3基とピット群を確認した。土壌群およびピット群の有り様には規則性は見られず、掘立柱建物などの確認には至らなかった。

### SK01 (Fig. 6)

調査区の中央よりやや南側に位置する楕円形の土壌である。長軸1.20m、短軸0.62m、深さ0.12m、主軸の傾きはN-88°-Wを測る。埋土は地山土の崩落土（2層）と自然埋没土（1層）から成る。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

### SK02 (Fig. 6)

調査区のほぼ中央に位置する隅丸長方形の土壌で、長軸1.37m、短軸0.81m、深さ0.20m。主軸の傾きはN-55°-Wを測る。埋土は自然埋没土（2、3層）とその後の掘込みに伴うもの（1層）とに大別できるが、この土壌の再利用を目的としたものか、別の遺構が存在するのかわ不明である。

### SK03 (Fig. 6)

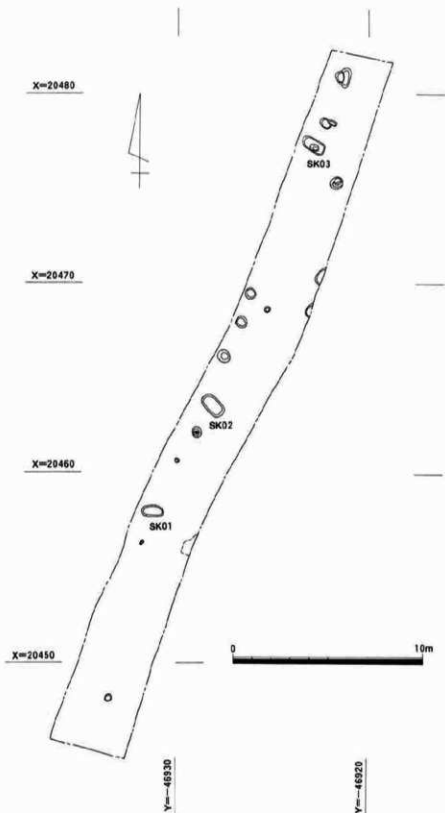


Fig. 5 常用野中遺跡全体区 (S=1/200)

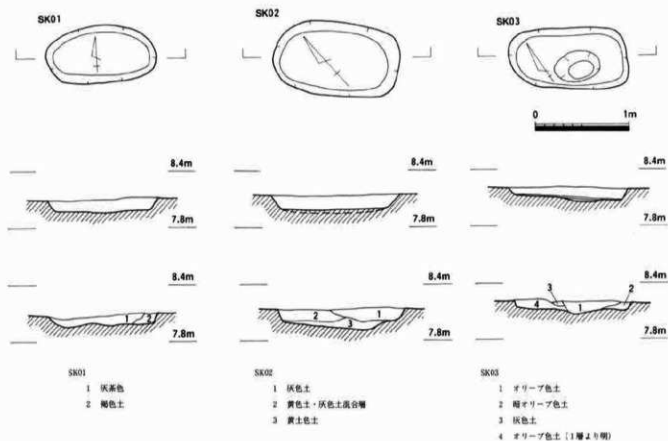


Fig. 6 SK01・SK02・SK03 (S=1/40)

調査区の北側に位置する隅丸方形の土壌で、長軸1.27m、短軸0.67m、深さ0.29m。主軸の傾きはN-58°-Wを測る。埋土状況からは別の土壌が切り合っているように見える（1層）が、検出時点ではこれを確認できなかった。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

### 3 小結

今回の調査では遺物の出土が無く、遺跡の年代を決定づけるまでには至らなかった。また遺跡の性格についても、今回の調査がトレンチ状の調査であり、まとまった面を調査できなかったこと、そして周辺遺跡についても同様の調査状況であり、比較対象としての状況ではないことから、結論を導き出すまでには至らなかった。今後、周辺での調査例の増加が待たれるところである。





しむらしもふけ  
第2節 志下婦計遺跡 第1次地区の調査

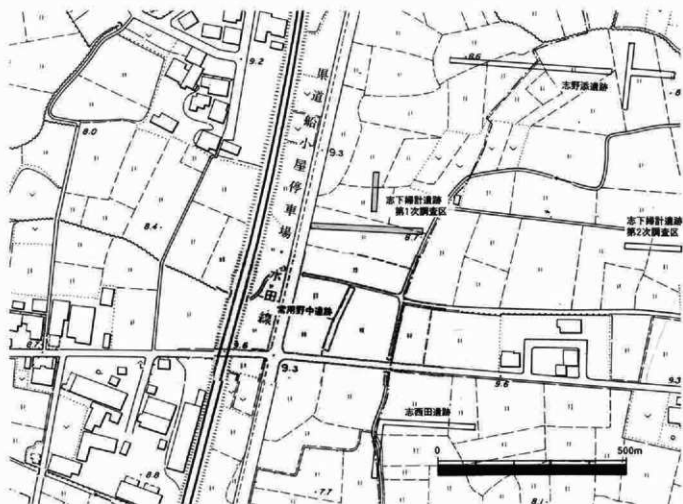


Fig. 7 志下婦計遺跡第1次調査区周辺地形図 (S=1/2,500)

1 調査概要

志下婦計遺跡第1次調査区は、筑後市大字常用字福市から大字志下婦計に所在する。標高約8mの低位段丘上に位置し、調査前は水田・麦畑などの耕作地であった。調査は第7号支線排水路の建設に伴い掘削の及ぶ地区について行われた。調査対象面積は約540m<sup>2</sup>である。調査は圃場整備事業により表土がすでに取り除かれていたため、表土直下面（暗褐色土）から遺構面を確認することから始められた。遺構面はこの暗褐色土を約30cmほど掘り下げたところで確認された。調査期間は1997年12月1日～同26日で、常用野中遺跡の調査と平行して行われた。



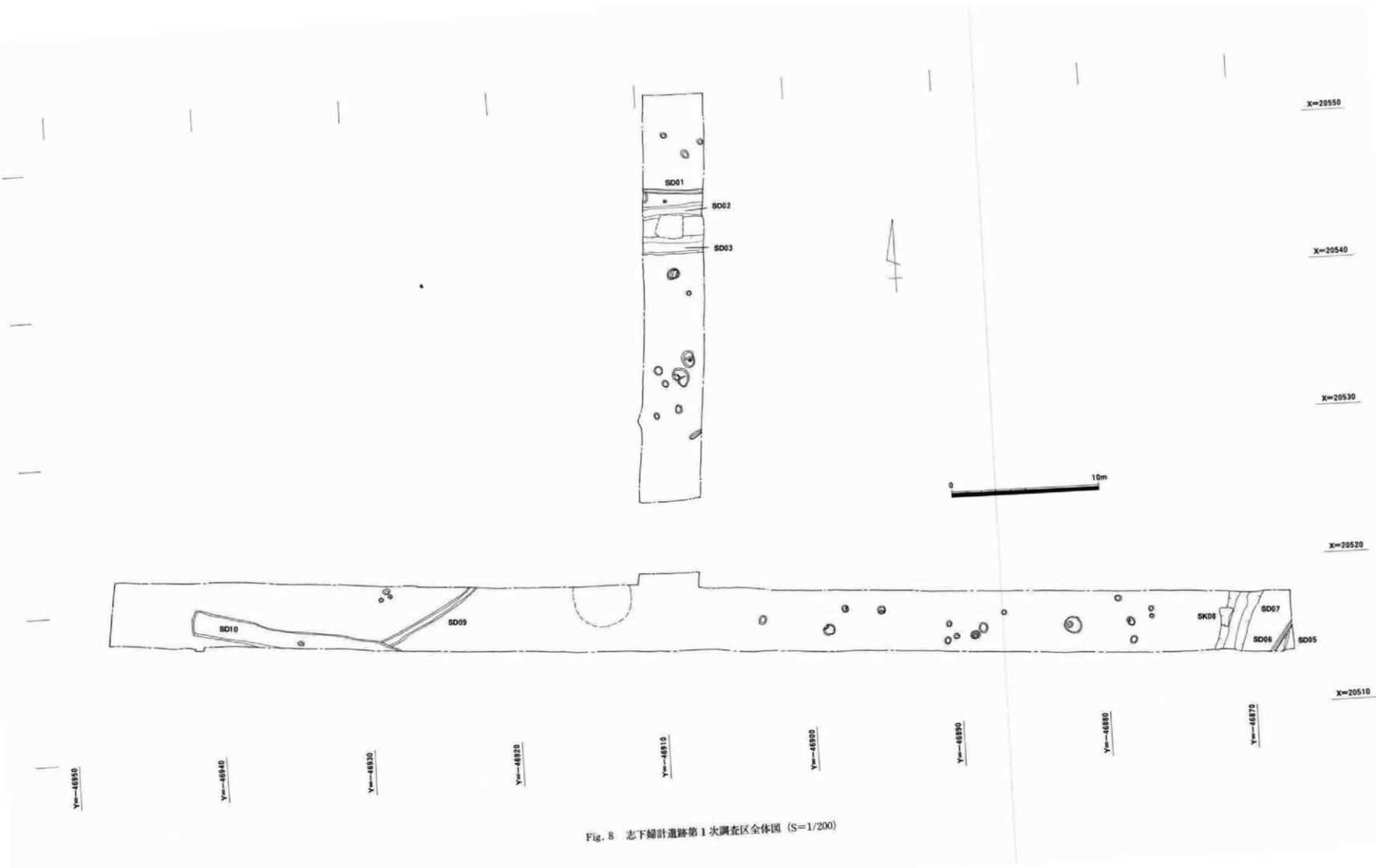
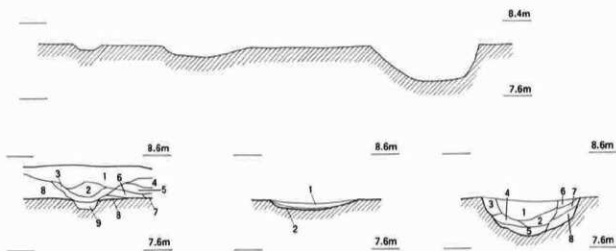
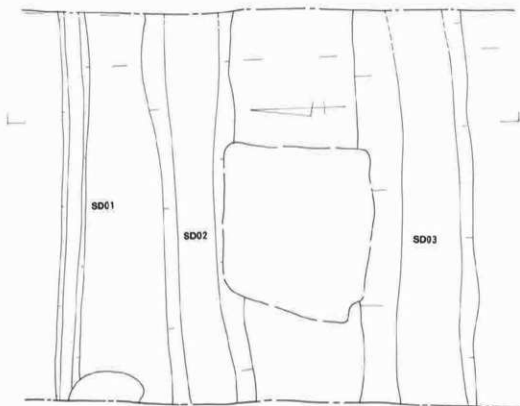


Fig. 8 志下廻計道路第1次調査区全体図 (S=1/200)





SD01

- 1 オリーブ色砂質土
- 2 暗オリーブ色砂質土
- 3 暗灰色砂質土
- 4 暗茶オリーブ色砂質土
- 5 オリーブ色砂質土 (1層より暗)
- 6 暗オリーブ色砂質土 (2層に同)
- 7 暗灰色砂質土 (地山土を含む)
- 8 黄褐色粘質土

SD02

- 1 暗灰色砂質土
- 2 暗灰色砂質土  
(SD01の7層と同一層)

SD03

- 1 黒茶色土
- 2 黒色土
- 3 茶色土
- 4 黒茶色土 (1層より暗)
- 5 茶色土
- 6 暗茶色土
- 7 黒茶色土
- 8 黒色土・黄色土混合同層

Fig. 9 SD01・02・03 (S=1/40)

## 2 遺構と遺物

志下郷計遺跡遺跡第1次調査区では、8条の溝と多数のピットが確認された。溝はあまり深くなく、調査前の畔や水路とはほぼ同位置で確認されたものが多い。ピット群からの建物の復元はできなかった。

### SD01 (Fig.9)

調査区の北側に位置する溝で、SD02に平走している。SD01は検出面で上幅0.28m、下幅0.17m、深さ0.09～0.17m。底面はおおむね平坦で、断面は逆台形状、ほぼ東西方向に走る溝である。調査区壁面の土層観察から、SD01～03の一連の溝は、南側に位置するものほど古いものであることが確認されている。

この溝からは、遺物の出土はなかった。

### SD02 (Fig.9)

調査区の北側に位置する溝で、SD01とSD03に挟まれる形で東西方向に走っている。検出面での上幅0.58～0.93m、下幅0.47～0.56m、深さ約0.15m。断面は皿状をしており、西側の方が低く傾斜する。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

### SD03 (Fig.9)

調査区の北側に位置する溝で、SD02の南側に、東西方向に平走する形で位置する。検出面での上幅約1.17m、下幅約0.60m、深さ0.35m。断面は上方へ大きく広がるU字状をしており、西側のほうが低く傾斜する。土層の観察から、最低1回は掘り直しが行われたものと考えられる。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

### SD05 (Fig.10)

調査区の東端に位置する溝で、SD06に切られている。調査区の隅に位置することから、その一部のみの確認となった。ほぼ南北方向に走る。この遺構からの遺物の出土はなかった。

### SD06 (Fig.10)

調査区の東端に位置する溝で、SD05を切っている。検出面で上幅約0.28m、下幅約0.13m、深さ

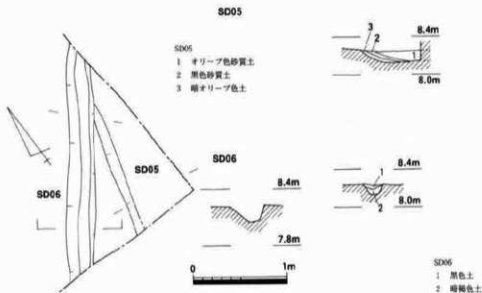


Fig.10 SD05・06 (S=1/40)

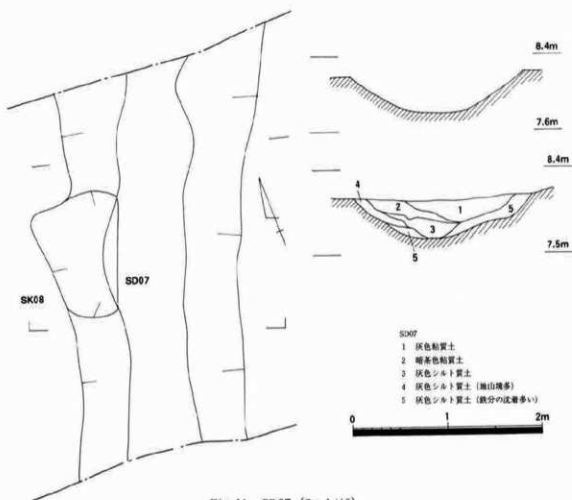


Fig.11 SD07 (S=1/40)

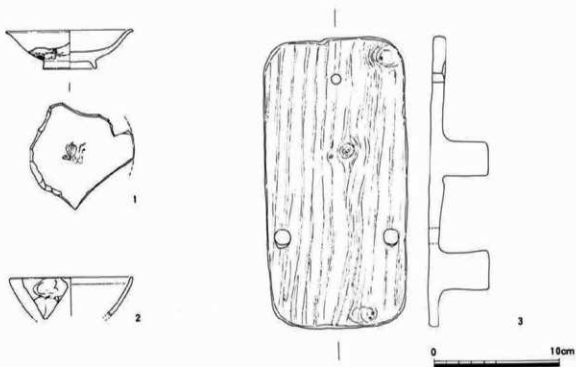


Fig.12 SD07出土遺物 (S=1/3)

約0.13m。東北から南西方向に走り、底面も同様の方向に傾斜する。段面形は緩やかなU字状を呈している。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

#### SD07 (Fig. 11)

調査区東側に位置する溝で、SK08を切る。検出面での上幅約1.72~2.10m、下幅約0.50~0.70m、深さ約0.60~0.35m。南側へ緩やかに傾斜し、主軸はほぼ南北方向をとる。土層の観察から、最低2回の掘り直しが想定される。

出土遺物には陶磁器片と下駄がある (Fig. 12)。1は浅い碗で、内面には明青色で扇を、外面には暗青色で柿の木などを表現している。2は最下層から出土した碗の破片で、内面には2条の線を、外面には樹木と思われる図柄が描かれている。3は木製の連歯の下駄である。

SD07は、SK08の遺物の中に近代の遺物が見られることから、近代以降のものだと判断した。

#### SD09 (Fig. 13)

調査区西側より検出された浅く細い溝で、南端をSD10に切られている。検出面で上幅約0.20~0.30m、下幅約0.10~0.20m、深さ約0.10~0.20m。東北東から西南西の向きに走っている。底面の傾きは残存部分がわずかなため判断できない。

出土遺物には陶器の底部破片が出土した (Fig. 14)。内面は底部より約3cmの高さまで施釉し、外面は反対に底部から3cmの高さの所で軸葉が跡絶えている。また、底面には煤の付着が認められる。小破片のため、時期の特定に至るものではない。

#### SD10 (Fig. 15)

調査区東側から検出された幅広く浅い溝で、東側でSD09を切っている。検出面での上幅約1.70m、下幅約1.30m、深さ約0.15m。西

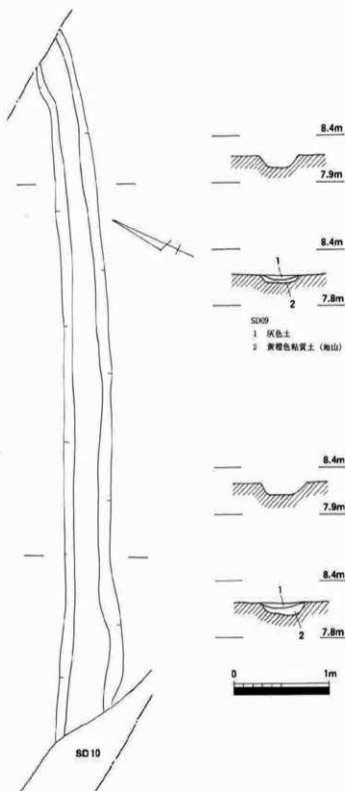


Fig. 13 SD09 (S=1/40)



Fig. 14 SD09出土遺物 (S=1/3)



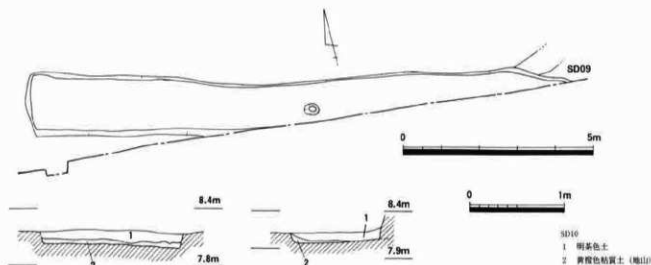


Fig.15 SD10 (S=1/100・1/40)



Fig.16 SK08出土遺物 (S=1/3)

北西から東南東へ走るが、底面の傾きは不明である。

この溝からの出土遺物はなかった。

#### SK08 (Fig.11)

調査区東側で確認された土壌で、大部分をSD07に切られている。そのため平面プランや底面までの深さなどは不明である。

遺物としては陶磁器、青磁片、素焼きの土管などがある (Fig.16)。1はプリント柄の湯飲、2は無地の碗で、いずれも磁器である。これらのものは近代以降の所産であると判断した。

#### その他

今回の調査区の周辺では陶磁器、寛永通寶などが採集された。陶磁器は小片で、図化しうるものではないが、時代を遡るようなものではない。寛永通寶 (Fig.17) は、文面の痛みも激しく、かろうじてそれと認識できるものである。



Fig.17 寛永通寶拓影 (S=1/1)

### 3 小結

今回の調査によって確認された溝は、それぞれ北 (SD01～03)、東 (SD05～07)、西 (SD09・10) の3つにグループ分けができる。このうち、北と東のグループについては最近まで使用されていた畔や水路には平行していることが確認できる (Fig. 8 参照)。これらのうち規模の小さいものについては土層観察では明らかにしえなかったが、水田脇の小水路であった可能性がある。

また、遺物はSD07、SK08からしか確認できなかった。これらの大半が近代以降の所産である。これは今回の圃場整備事業が行われる前の土地区画がなされた年代を示す手がかりになりうるかもしれない。今後この地域における資料の増加に期待したい。



### 第3節 志下婦計遺跡 第2地区の調査

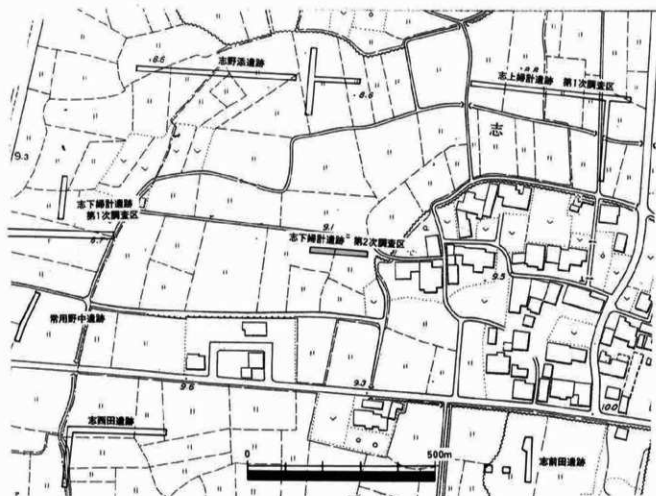
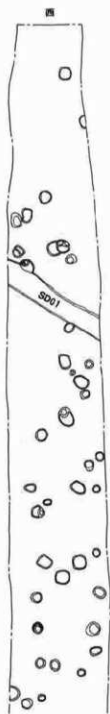


Fig.18 志下婦計遺跡第2次調査区周辺地形図 (S=1/2,500)

#### 1 調査概要

志下婦計遺跡第2次調査区は、筑後市大字志下婦計に所在し、志集落のすぐ西側に位置している。標高約9mの低位段丘上にあり、調査前は水田・麦畑などの耕作地であった。調査は第7号支線排水路の建設に伴い、掘削を受ける部分について行われた。調査対象面積は約140㎡である。調査期間は1998年1月5日から2月上旬に及び、志前田遺跡の調査と平行して行われた。調査は圃場整備事業により表土がすずに取り除かれており、この面からの遺構面の確認から行われた。結果、遺構面を重機により約70cmほど掘り下げた黄茶色粘土層において確認した。遺構は溝1条、ピット群を確認した。



※方位・座標に関しては測量器材の誤差により不明。

Fig. 19 志下婦計遺跡第2次調査区全体図 (S=1/100)

## 2 遺構と遺物

今回の調査において確認された遺構は溝1条とピット群である。ピット群には植物の根痕も多く、これらからの建物の復元には至らなかった。

### SD01 (Fig.20)

調査区の東側で検出された遺構で、検出面での上幅約0.50m、下幅約0.45m、深さ約0.10mを測る。東北から南西に向かって走り、溝の下場もこの方向に緩やかな傾斜を有する。埋土は褐色土の単一土層である。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

## 3 小結

志下婦計遺跡第2次調査区における溝状遺構の在り方は、第1次調査区の溝の在り方にも見られたような、旧地形の畔境に平走するというものであった。このことから、この溝も畔に沿って掘られていた小水路であろう。

また、今回の調査区と南側の住宅との間で瓦質土器の破片を採集した (Fig.21)。この周辺にこの遺物が該当する時期の遺跡が存在する可能性を示すものと見たい。

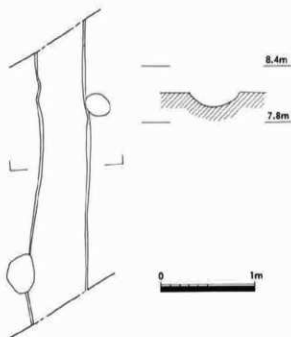


Fig.20 SD01 (S= 1 /40)



Fig.21 周辺採集遺物 (S= 1 /3)



## 第4節 <sup>しむら</sup>志西野々遺跡の調査

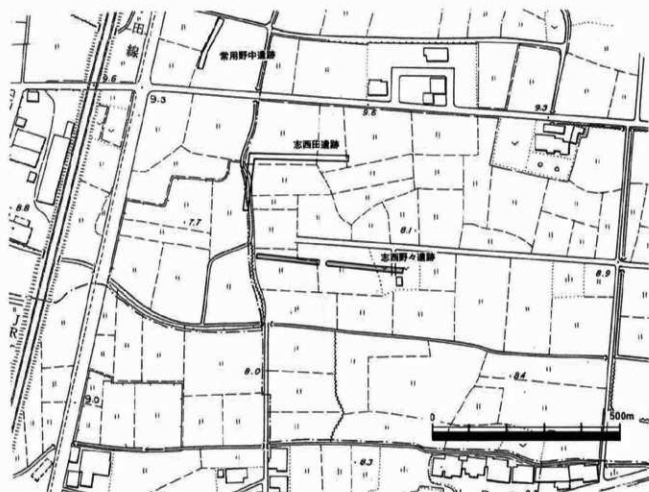


Fig. 22 志西野々遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)

### 1 調査概要

志西野々遺跡は筑後市大字志西野々に所在する。北の志集落と南の津島東集落とに挟まれた、標高約8mほどの低位段丘上に位置する。調査前は水田や畑などの耕作地であった。調査は第9号支線排水路の建設に伴い、掘削の及ぶ範囲について行われた。調査対象面積は約520㎡である。調査は、圃場整備事業側により表土が取り除かれており、ここから重機により遺構面まで掘り下げることから始められた。調査期間は1997年11月4日から1ヶ月の予定で行われたが、調査区東側において縄文時代早期の遺物包含層が予期せず確認された。また数回の降雨の結果、圃場整備地区に降った雨水が遺跡内に流入し、度々水没してしまった。これらの結果12月16日まで工期が引き伸ばされることとなり、志前田遺跡、志下畑遺跡、常用野中遺跡などの調査と一時併行して行わざるを得ない状況となった。調査の結果、東側で縄文時代の石組みが、遺物包含層、近代のものと思われる土壌（井戸か）、溝を、西側で中世から近世のものと思われる溝を確認した。調査区東側の包含層部分については、任意でグ



X=20330

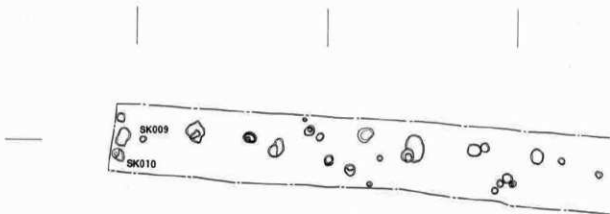


X=20320

Y=46990

Y=46890

Y=46880



0 10m

A horizontal scale bar with a black bar in the middle, indicating a length of 10 meters. The number '0' is at the left end and '10m' is at the right end.

Y=46850

Y=46840

Y=46830

Fig.23 志西野々遺跡全体図1 (S=1/200)

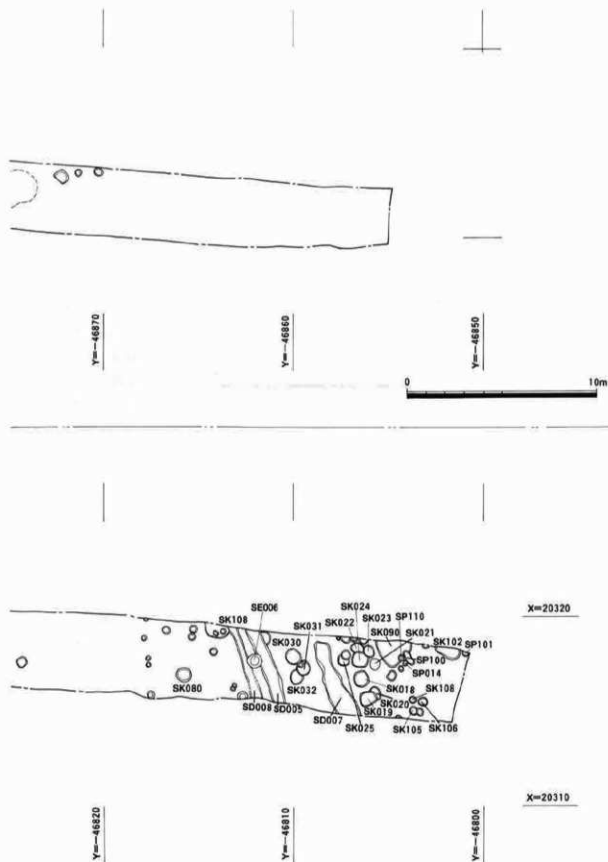


Fig.24 志西野々遺跡全体図2 (S=1/200)

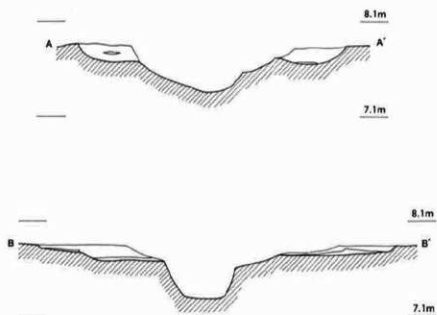
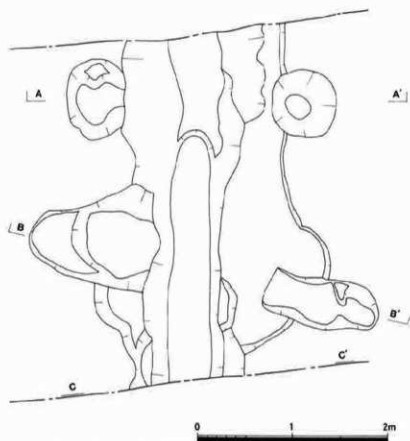


Fig. 25 SD01 (S=1/40)

リットを設定し、調査と遺物の取り上げを行った。また、調査区外の工事用排水路から出された廃土中からも、弥生時代以降の遺物が採集された。

## 2 遺構と遺物

### SD01 (Fig.25・26)

調査区西側で検出された、ほぼ南北方向に走る溝である。検出面での上幅約1.15～1.65m、下幅約0.42～0.50m、深さ約0.50m。底面には段差が見られ、南側に低くなっている。図面に問題があるが、調査区南側の壁面での土層の観察からは、最低1回の掘り直しが行われ、その後は自然埋没をしていったと思われる。また、SD01の他にも規模の小さな溝が、いくつか確認できる。調査区の西側のすぐ脇には圃場整備前まで利用されていた水路が走っており、これらはこの水路やこれに平行して作られていた畔に伴う小水路の痕跡ではないかと考えられる。

SD01の両脇には浅い掘込みが向かい合うような形で検出された。これらは簡単な架橋施

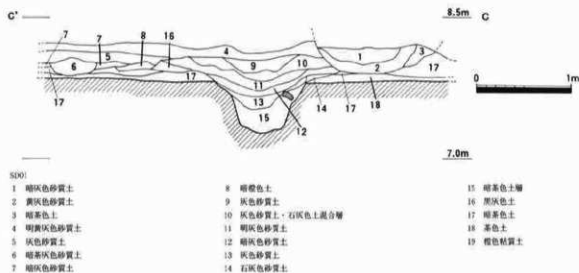


Fig. 26 SD01土層断面図 (S=1/40)



Fig. 27 SD01出土遺物 (S=1/3)

設ではないかと考えられる。

この遺構からの出土遺物には土鍋の小破片がある (Fig.27)。13層より上の埋土から出土しており、いずれも玉縁状の口縁部をもち、外面には煤が付着している。1は内外面ともにナデ、2は内面ナデ後ハケ目、外面はナデが施されている。

#### SD005 (Fig.28)

調査区の東側で検出された溝状の遺構でSEG06に切られている。検出面での上幅約0.52m～0.64m、下幅約0.42～0.53m、深さ約0.09m～0.17m。底面はほぼ平坦で、断面形は上方へきつく立ち上がる逆台形状をしている。北西から南東に向かって走っており、底面はほぼ平坦である。埋土の観察状況から、最低1回の掘り直しが行われたものと見られる。SD005の東側にはSD007が平行する形で検出された。この位置は旧地形では約1.5m幅の農道が位置しており、両者間の距離からもこれに近接して

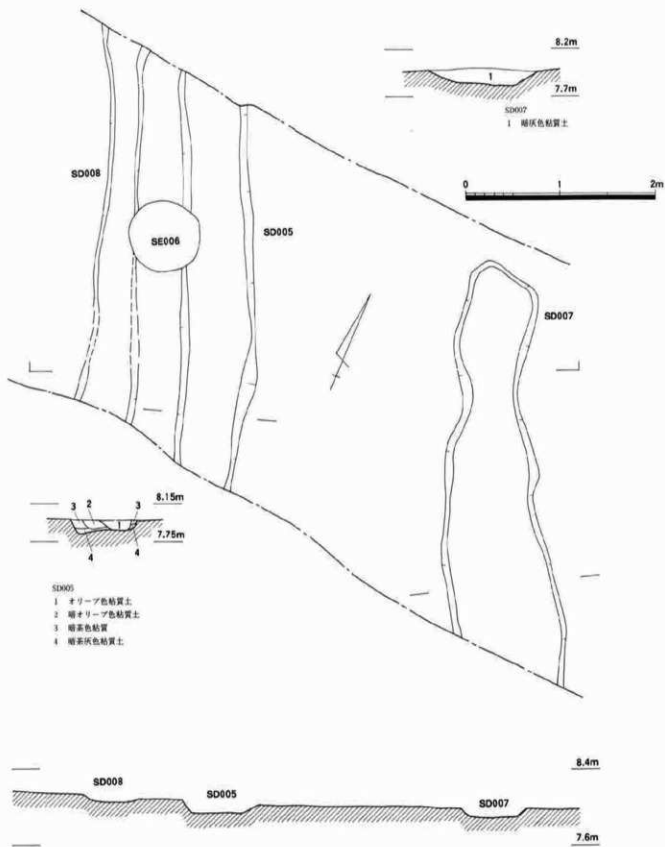


Fig.28 SD005・007・008 (S=1/40)

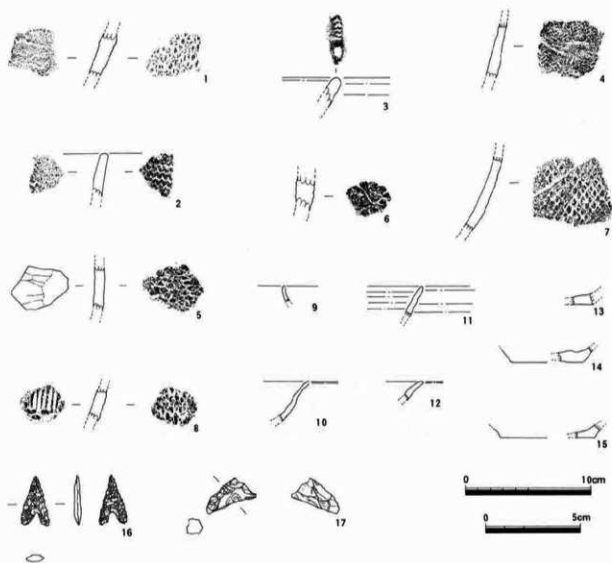


Fig.29 SD005・007出土遺物 (S=1/3・1/2)

設けられた小水路の痕跡であると考えられる。

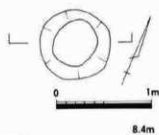
この遺構からの出土遺物には縄文土器片 (Fig.29-1~4)、土師器 (11) がある。これらのうち、縄文土器は周辺の包含層からの混入品である。

#### SD007 (Fig.28)

調査区の東側に位置する溝状の遺構で、SD005の東側をこれに平走する形で位置している。検出面での上幅約0.90m~0.47m、下幅約0.84m~0.43m、深さ約0.13m~0.09m。底面はほぼ平坦で、断面形は上方に広く開いている。埋土は暗灰色粘質土の単一層である。この溝は前述のようにSD005と対をなす農道脇の小水路だと考えられる。

この遺構からは縄文土器片 (Fig.29-5~8)、須恵器 (9・10)、土師器 (12~15)、石鏃 (16)、銅片 (17) がある。縄文土器、石製品は周辺の包含層からの混入品、須恵器も周辺からの混入品と考えられる。

SD008 (Fig. 28)



調査区の東側に位置する溝状の遺構で、SD005の西側を平走し、SK006に切られる形で検出された。検出面での上幅約0.52m～0.27m、下幅約0.40m～0.18m、深さ約0.03m。底面はほぼ平坦で、断面形は浅い皿状をしている。農道や畔に伴う小水路の痕跡と考えられる。

この遺構に伴う遺物の出土はなかった。

SE006 (Fig. 30)



Fig. 30 SE006 (S = 1/40)

調査区の東側、SD005とSD007の間に両者を切る形で検出された土壌である。井戸として調査を進めたが、底部からの湧水はなかった。検出面での直径約0.52m～0.48m、底面の直径約0.40m～0.34m、深さ約0.60mを測る。雨水による水没の結果土層観察のために残っていた部分が崩落したため、土層面の観察ができなかった。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

SK009 (Fig. 31)

調査区中央部で検出された隅丸長方形の土壌で、SK010の北側に位置する。長軸約0.98m、短軸約0.50～0.60m、深さ約0.06m。主軸の傾きN-24°-Eを測る。

この遺構からはサヌカイト製の石鏃がある (Fig. 32)。風化のためか全体に細かなひび割れが生じ、先端部を欠損している。出土状況から見て、混入品と思われる。

SK010 (Fig. 31)

調査区中央部で検出された卵型の土壌で、SK009の南側に位置する。底面は2段掘りで長軸約0.73m、短軸最大約0.54m、深さは最深部で0.15m。主軸の傾きはN-33°-Wを測る。この遺構からの遺物の出土はなかった。

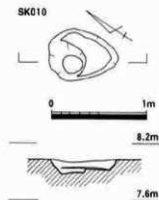
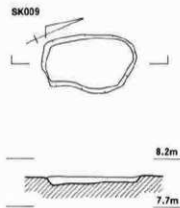


Fig. 31 SK009・010 (S=1/40)



Fig. 32 SK009出土遺物 (S = 1/3)

SK018 (Fig.32)

G4、H4グリットから検出された検出された土壌で、北にSK024、西にSD007、南にSK019が位置している。長軸幅0.82m、短軸幅0.77m、深さ0.11-0.08m。主軸の傾きはN-18°-Wを測る。遺構内に比較的焼石を残す土壌である。この遺構内からはこのほかに縄文土器片を出土した (Fig.34-6・9・10)。いずれも押型土器で、底部片は尖底と丸底の2種類が見られる。

SK019 (Fig.33)

G3グリットから検出された隅丸方形の土壌で、北側にSK018が位置し、東側のSK020を切っている。長軸幅最大約0.93m、短軸幅最大約0.72m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN-63°-Eを測る。遺構内には若干の焼石が残っていた。この遺構からは、この他の遺物は確認されなかった。

SK020 (Fig.33)

G3グリットから検出された楕円形の土壌で、西側のSK019に切られている。残存部分での長軸幅約0.75m、短軸最大幅約0.43m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN-30°-Wを測る。遺構内には数個の焼石と縄文土器片が出土した。縄文土器はいずれも押型土器であるが、実測しうるものではなかった。

SK021 (Fig.33)

G5グリットをを中心に検出された円形の土壌で、北にSK023、西にSK024が位置する。長軸幅約0.57m、短軸幅約0.50m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN-6°-Eを測る。遺構内には3個の焼石が確認された。この遺構からはこの他の遺物は確認できなかった。

SK022 (Fig.33)

H5グリットから検出された楕円形の土壌で、東側にあるSK023、南側のSK024に切られている。残存部分での長軸幅約0.64m、短軸幅約0.55m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN-77°-Wを測る。この遺構からは数個の焼石と縄文土器片が出土した。縄文土器はいずれも押型土器であるが実測しうるものではなかった。

SK023 (Fig.33)

G5グリットから検出された円形の土壌で、東側にSX090が位置し、南側のSK024、西側のSK022を切っている。長軸幅約0.66m、短軸幅約0.53m、深さ約0.03m。主軸の傾きはN-50°-Wを測る。この遺構からは縄文土器片が出土した。いずれも押型土器であるが、実測しうるものではなかった。

SK024 (Fig.33)

H5グリットを中心に検出された土壌で、東にSK021、南にSK018、西にSK025が位置し、北のSK022を切りSK023に切られている。長軸幅約0.87m、短軸幅約0.80m、深さ約0.03m。主軸の傾きはN-88°-Eを測る。この遺構からは焼石、縄文土器片を出土した (Fig.34-1・7)。縄文土器はいずれも押型土器である。

SK025 (Fig.33)

L5グリットを中心に検出された楕円形の土壌で、東側にSK024、西にSD007が位置し、北側を小ビツ



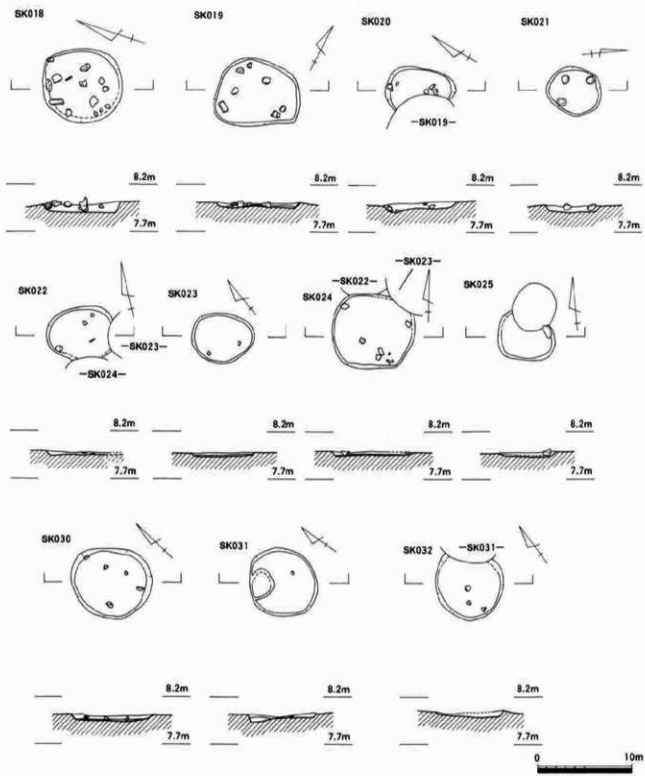


Fig.33 調査区東側土壌群 (石組み炉) (S=1/40)

トによって切られている。長軸幅約0.60m、短軸最大幅約0.52m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN-85°-Wを測る。この遺構からは数個の焼石を出土している。

#### SK030 (Fig.33)

K5グリットを中心に検出された土壌で、東側にSD007、西側にSD005、南側にSK031が位置する。長軸幅約0.85m、短軸幅約0.75m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN-44°-Wを測る。この遺構からは焼石、縄文土器片を出土した (Fig.34-2・3・5・8)。8は外面にミガキの痕跡が認められる。これ以外は押型文土器であるが、このうち3は壺型注口土器 (以後省略して「壺」と記す) の口縁部となる可能性がある。

#### SK031 (Fig.33)

K4グリットを中心に検出された土壌で、東にSD007、西にSD005、北にSK030が位置し、南側のSK032を切っている。長軸幅約0.72m、短軸幅約0.70m。底面は2段掘りとなっており、上段までの深さ約0.05m、下段までの深さ約0.08mを測る。主軸の傾きはN-35°-Wをもつ。この遺構からは焼石片が出土している。

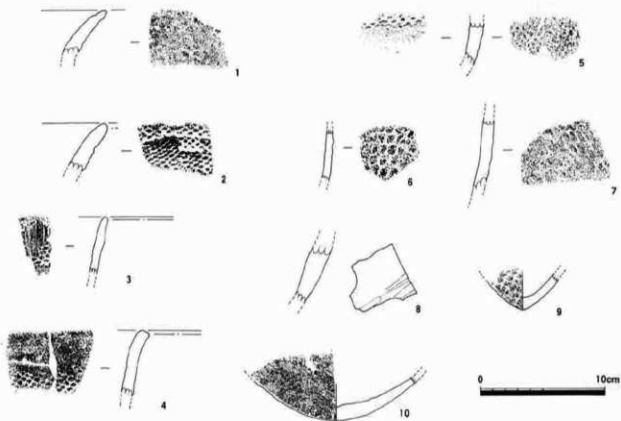


Fig.34 調査区東側土壌群 (石組み型) 出土遺物 (S=1/3)

SK032 (Fig.33)

K3グリットを中心に検出された土壌で、東にSD007、西にSD005が位置し、北側のSK031に切られている。長軸幅約0.72m、最大短軸幅約0.62m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN-53°-Wを測る。この遺構からは焼石、縄文土器片などを出土した。縄文土器 (Fig.34-4) は深鉢の口縁部で、内面に押型文が施されている。

SK080 (Fig.35)

Q3グリットから検出された土壌で、他の土壌とは大きく離れて存在している。出土遺物の中には縄文土器 (Fig.36-1・2)、石鏃 (4) などが見られる。縄文土器は押型文土器 (2) と無文土器 (1) である。

SK107 (Fig.35)

M5グリットから検出された土壌で、西側をSD005に切られている。深さは約0.05m。遺物としては焼石、縄文土器片を出土している。縄文土器は押型文土器 (Fig.36-3) である。

SX090 (Fig.24)

F5グリットを中心に検出された土壌で、深さは約0.15mを測る。底面は若干の凹凸が認められるが、西側に深くなる傾向にある。

遺物としては焼石、縄文土器片、黒曜石片、サヌカイト片などを出土したが、図化したのはサヌカイト製の剥片だけである (Fig.37-1)。これは削器として利用された可能性がある。

SX102 (Fig.24)

C6グリットを中心に検出された不定形土壌である。深さは0.02-0.03mと浅く、底面もほぼ平坦である。遺物としては縄文土器片、黒曜石剥片、土師器などがあるが、図化したのは縄文土器片のみである (Fig.37-2-4)。いず

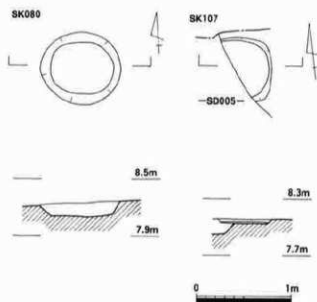


Fig.35 SK080・107 (S = 1 / 40)

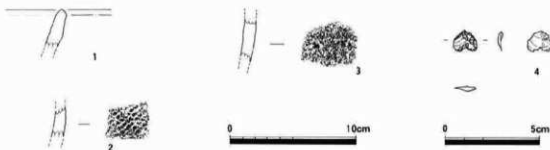


Fig.36 SK080・107出土遺物 (S = 1 / 3・1 / 2)

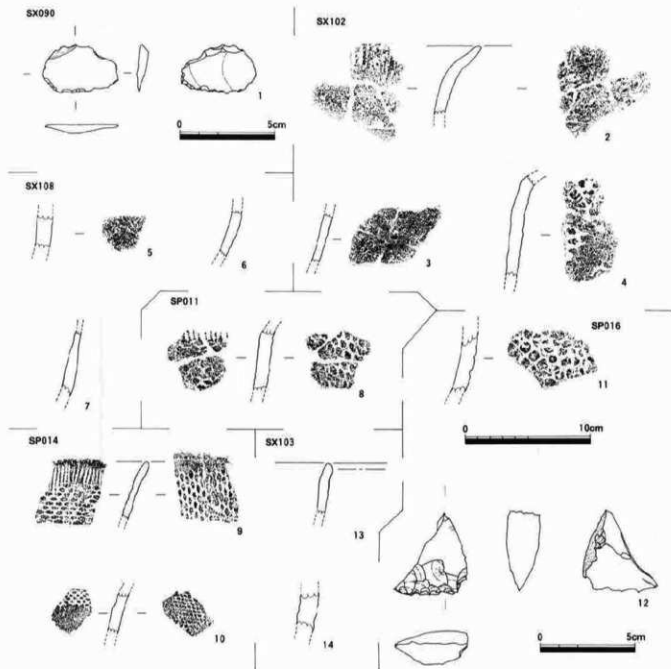


Fig.37 不明土壌・ピット群出土遺物 (S=1/3)

れも粗雑な楕円文を施した押型文土器である。このうち(4)は南側に位置するSP106出土の土器片と接合した。今回の調査において、このようにはなれた場所から出土した破片どうしが接合する例は少ない。

この遺構は土師器の混入から後世の掘込みと考えられるが、時期の断定までに至るものではない。

SX103 (Fig.24)

D6グリットから検出された土壌で、調査区境に位置しているため全体の形状は不明である。

この遺構からは縄文土器片を出土した (Fig.37-13・14)。13は無文土器の口縁部、14は押型文土器である。

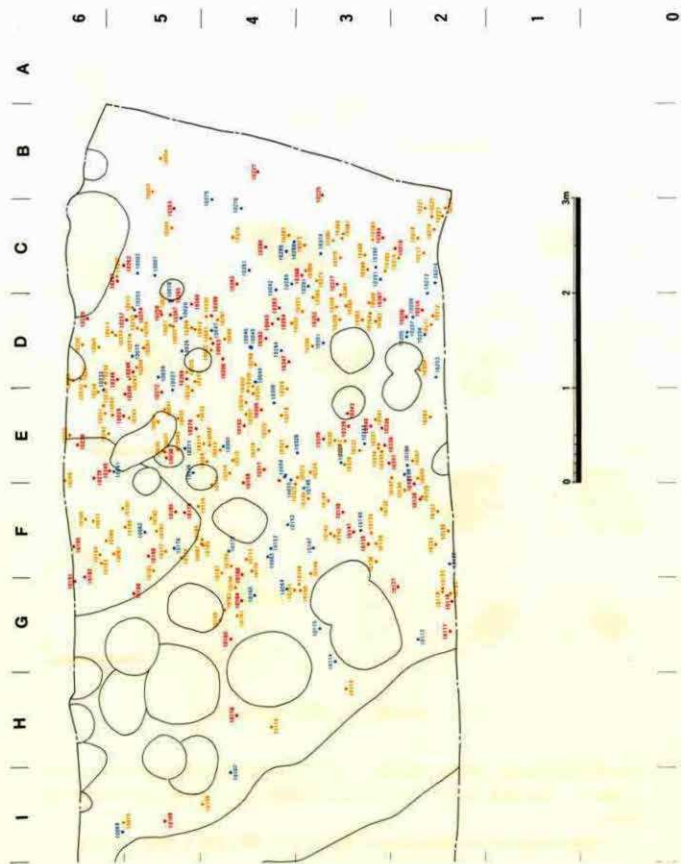


Fig. 38 包含層遺物出土狀況 1 (S=1/40)

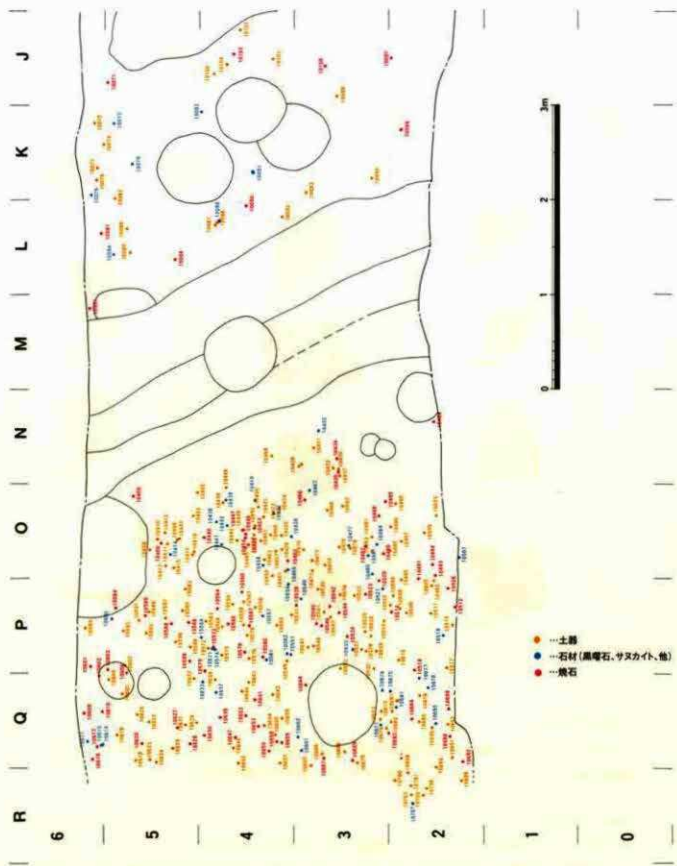


Fig. 39 包含層遺物出土状況 2 (S=1/40)

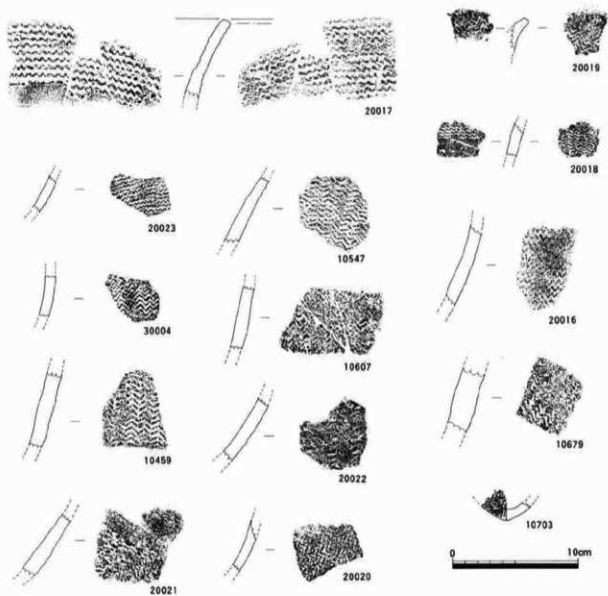


Fig.40 縄文土器 1 (山形文土器) (S=1/3)

SX108 (Fig.24)

O5グリットを中心に検出された不定形土壌である。遺物としては焼石、縄文土器片を出土した。縄文土器 (Fig.37-5-7) はいずれも磨滅が激しく、文様も不鮮明である。

SP011 (Fig.24)

O4グリットから検出されたピットで、直径0.40m、深さは0.05mである。

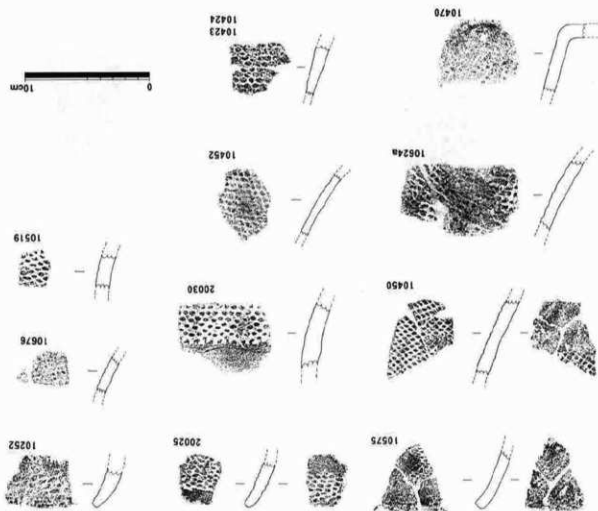
この遺構からは縄文土器片を出土した (Fig.37-8)。深鉢の口縁直下部分で、両面に楕円文が押圧施文されている。

包含層出土遺物 (Fig. 38-50)  
 調査区東側において確認された縄文早期の包含層の調査は、1m四方のグリットを任意に設定し行われた (Fig. 38・39)。しかしながら工期の関係上、Rグリットより西側の遺物においてはグリット単位による遺物の取り上げのみとなった。埋土は暗黄褐色土の単一土であり、その上部はすぐに耕作

SP016 (Fig. 24)  
 S4グリットから検出されたピットで、直径約0.25m、深さ約0.10mと小さなものである。この遺構からは縄文土器片 (Fig. 37-11)、サヌカイト片 (12) を出土した。(12) には2次加工痕が見られるが、用途は不明である。

SP014 (Fig. 24)  
 G5グリットで検出されたピットで、直径約0.35m、深さ約0.10mである。この遺構からは縄文土器片を出土した (Fig. 37-9・10)。いずれも押型文が施文されているが、深鉢よりも明らかに器壁が薄く、特に(9)は「蓋」となる可能性が高い。

Fig. 41 縄文土器 2 (楕円文土器) (S=1/3)





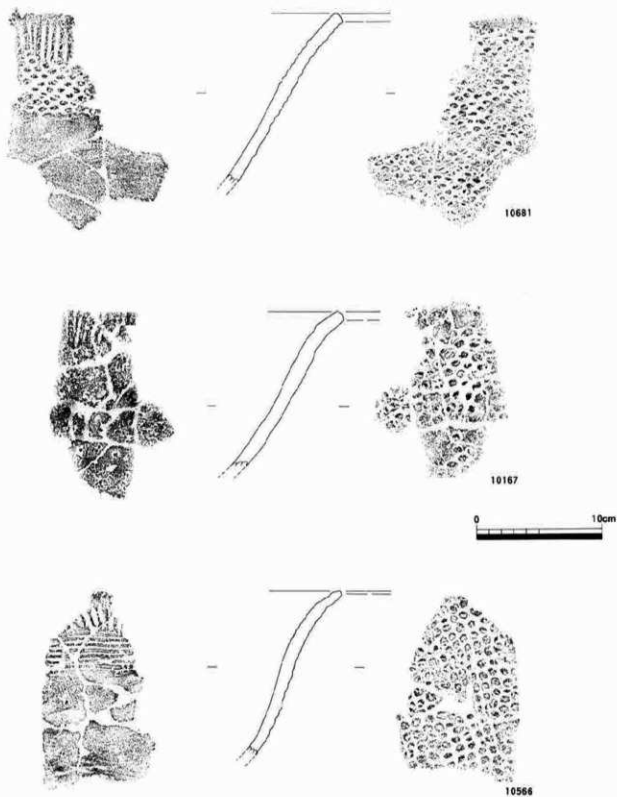


Fig.42 縄文土器 3 (楕円文土器) (S=1/3)

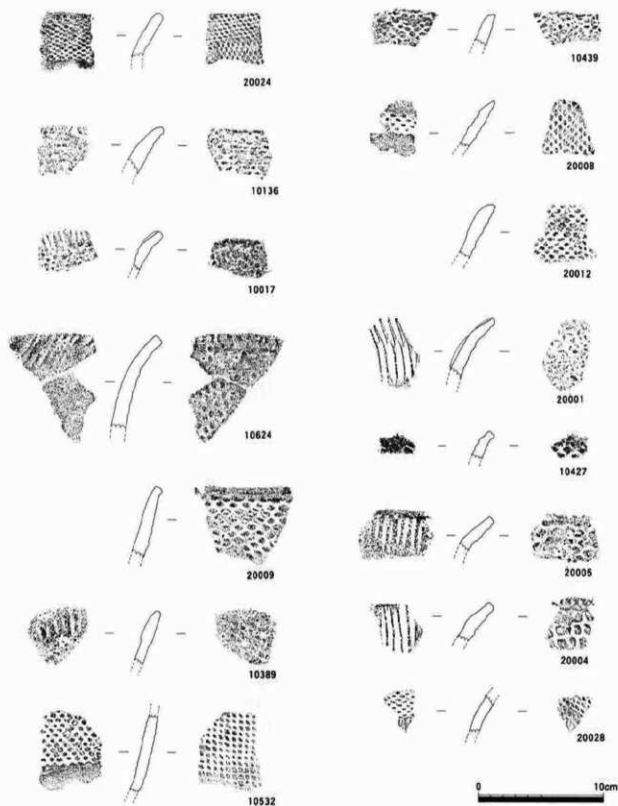


Fig.43 縄文土器 4 (楕円文土器) (S=1/3)

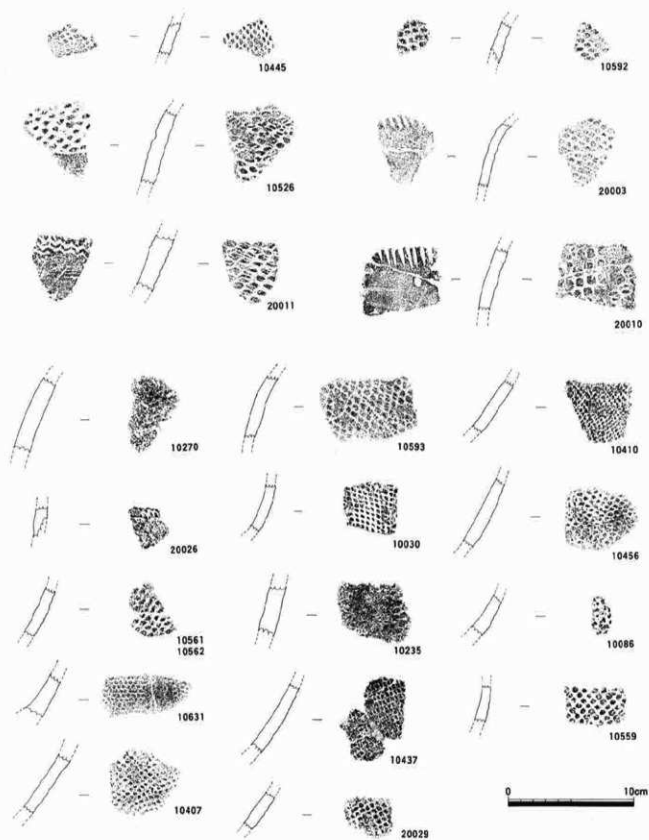


Fig. 44 縄文土器 5 (楕円文土器) (S=1/3)

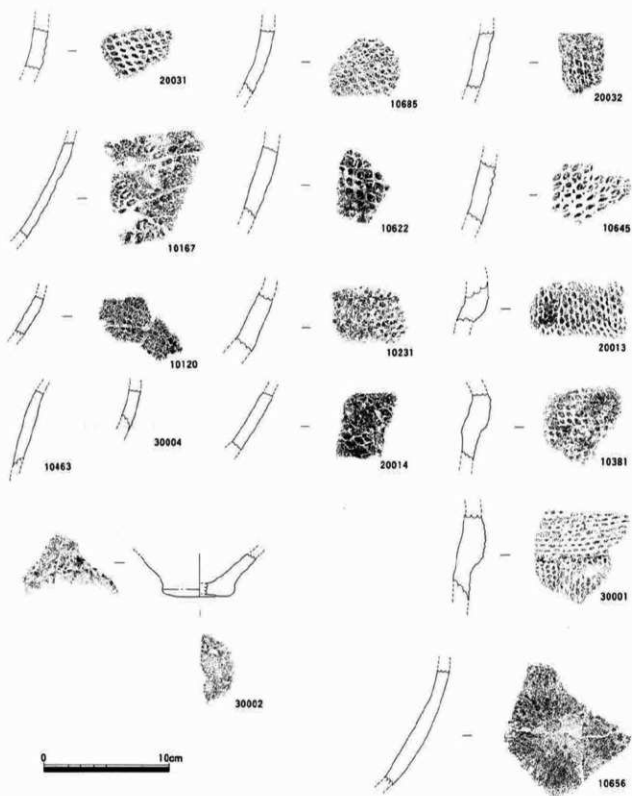


Fig.45 縄文土器 6 (楕円土器) (S=1/3)

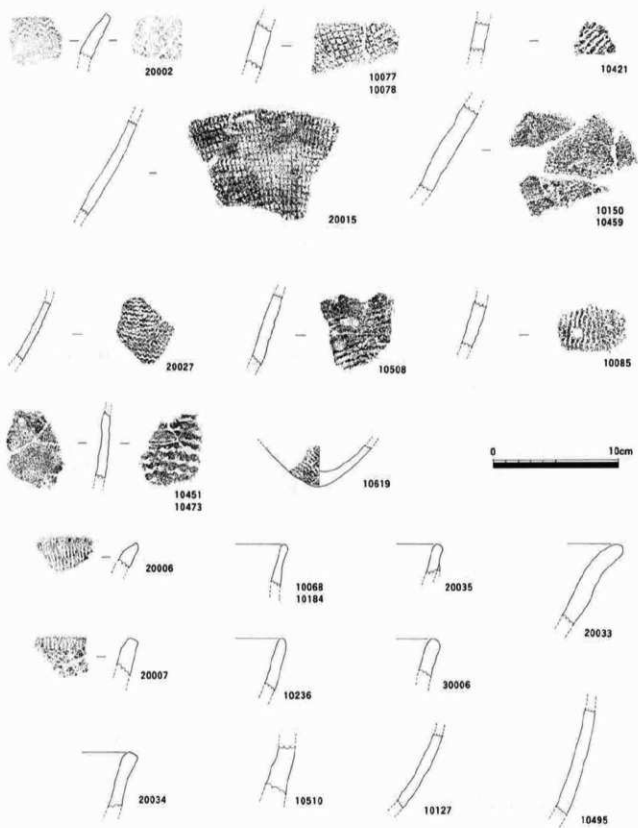


Fig.46 繩文土器7 (格子目文・撚糸文・無文土器) (S=1/3)

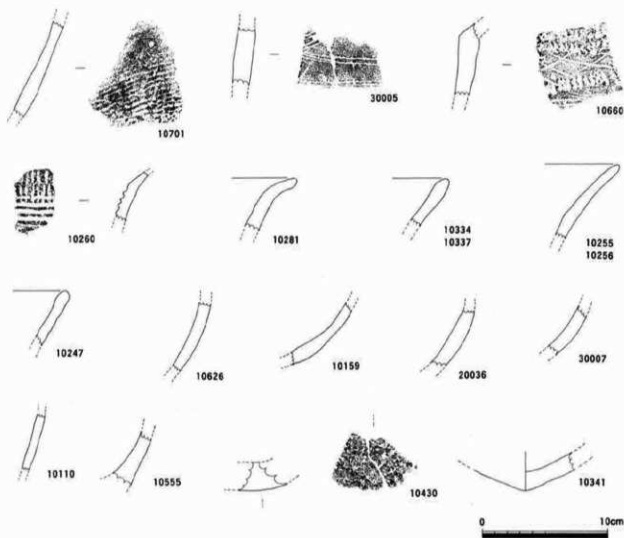


Fig.47 縄文土器8（その他）(S=1/3)

土となる。また、Vグリッドより西側からは遺物は検出されなかった。包含層からは、縄文土器、石器、黒曜石片、サヌカイト片、焼石（破片含む）などが採集された。遺物番号はなるべく取り上げ時につけたものを生かしている。10000番台は取り上げ時に番号を与えたもの。20000番台はグリッド単位で取り上げた、もしくは整理作業中の不注意で取り上げ番号が不明となったもの。30000番台は周辺表採遺物（重機で掘り出した包含層土中のものも含む）である。

縄文土器は押型文土器、無文土器を出土した。押型文土器には山形文、楕円文、格子目文、燃糸文、塞ノ神式土器などがあるが、器形の復元にまで至るものはない。

山形文（Fig.40）は、今回包含層より出土し実測を行った縄文土器の約14%と、比較的少ないほうである。紋様も小さいものから大きいもの、施文方向も横位方向から斜位、縦位とさまざまである。

楕円文（Fig.41-45）は、今回出土した縄文土器の内、約58%を占めている。未実測分を含め、その主体を占めているのが紋様の大きな個体である。このうちR20013、R10381、R30001はいずれも胴

部の破片であるが、上方が肥厚している。

格子目文 (Fig.46) は全体の4%にも満たないが、さまざまな大きさの原体を使用している。

巻糸文 (Fig.46) も全体の5%強と少ない。このうちR10150・10459はかなり細かな紋様が施されている。

無文土器 (Fig.46) は全体の9%を占めている。このうち、R20006、R20007は内面に細かな条痕を施している。小破片であるためその他の土器とすべきかもしれないが、ここに掲載した。また、R20035は欠損部分で若干肉圧となっている。

R10701 (Fig.47) は上部はミガキがなされ、下部は先端約1cm前後の細長い工具により刺突文が施文されている。近隣地域では類例を見ないものである。

R30005 (Fig.47) は胴部破片で、沈線文が施されている。これも近隣地域に類例を見ないものである。

R10660 (Fig.47) は器形から塞ノ神式土器の胴部破片と考えられる。S字状の工具により刺突文を施し、その間に沈線で格子目紋様を描いている。

Fig.48の土器片は「壺」と思われる破片である。

土器はこの他に紋様不明の土器 (Fig.47)、土器細片がある。

石類はその多くが焼石である。これらは円礫の安山岩、玄武岩であり、矢部川から持ち込まれたものと考えられる。石器素材としては黒曜石、サヌカイト、緑泥片岩、チャートなどが見られるが、製品となるものは少なく、その大半が割片であった。製品には尖頭器、石鏃、削器などが見られる (Fig.49)。そのほかには2次調整痕を持つ割片が見られる (Fig.50)。

#### その他の出土遺物 (Fig.51)

今回の調査区の南東側では折りからの秋雨により工事区が水没するのを防ぐため、排水用の水路が緊急避難的に掘削されていた。ここに紹介する遺物はこの水路を掘削した際に出された廃土の中から採集されたものである。図化したものは弥生土器、土師器などであるが、この他には須恵器の甕の破片などもあり、この周辺に時代幅の広い遺跡が存在する可能性を示している。

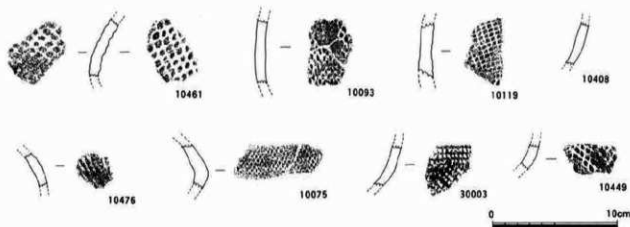


Fig.48 注口土器 (S=1/3)

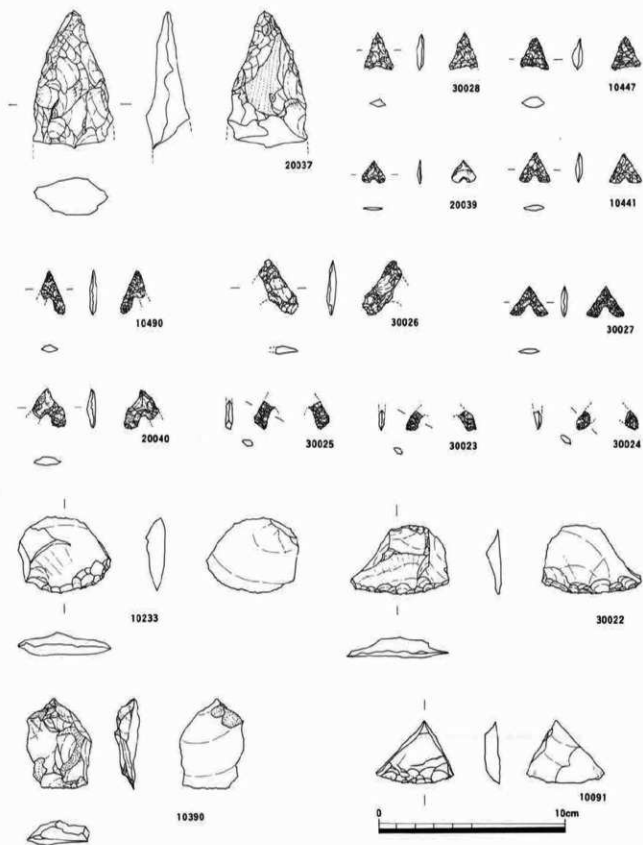


Fig.49 出土石製品 1 (S=1/2)



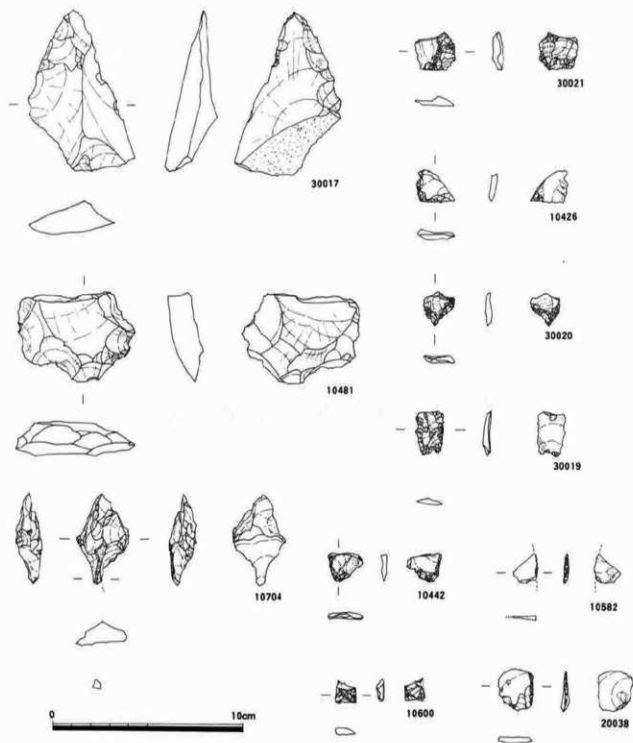


Fig.50 出土石製品 2 (S=1/2)

### 3 小結

今回の調査で確認された遺構は、中・近世の溝状遺構、それに付随するものと思われる井戸、縄文時代の土壇（石組炉と考えられる）、そして包含層である。このうち中・近世の溝状遺構は整備事業

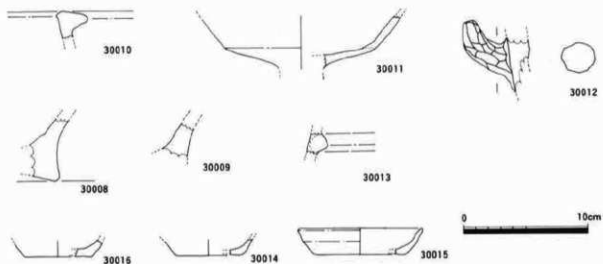


Fig.51 その他の出土遺物 (S=1/3)

前まで利用されていた農道や水路と平行して位置している。この在り方は他の調査区で確認された溝状遺構のものと同様である。

東側の縄文遺物包含層はVグリットより西側では遺物の確認はできなかったが、踏査によって表土直下面では更に西側へ広がる事が確認されている。また、東側については後述する志前田遺跡の西側部分まで縄文遺物が分布しているのが確認された。南側は確認された限りでは今回の調査区よりあまり広がらず、北側は宅地部分まで達している。また、志西田遺跡の南側でも黒曜石が採集されたが、弥生時代の石器なども含まれていたため縄文遺物の包含層がここまで広がることは断言できない状況である。

包含層部分に掘り込まれた土壌については石組みみ炉としているが、良好な形で焼石を出土した遺構は皆無であった。石材の再利用のために抜き取られたものか。また、土壌からは炭化物及び焼土も検

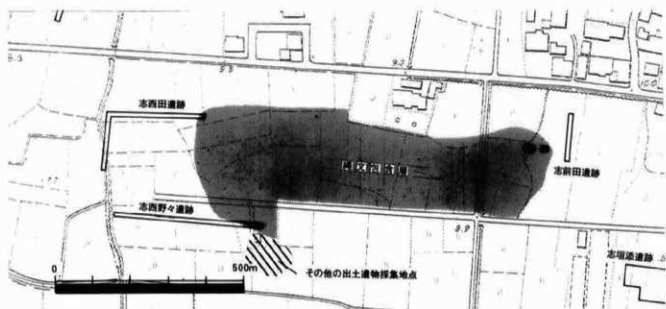


Fig.52 縄文遺物包含層位置図 (S=1/2,500)

出されなかった。このことから石材を別の所で熟して調理した蒸し焼き用の炉だとも考えられる。石組み炉から出土した土器は、土壌に付随したのではなく、混入品と考えられる。

東側の縄文時代包含層から出土した縄文土器は、押型土器を主体とし、これに1割程度の無文土器が含まれている。器形は深鉢と「壺」型の注口土器の2種があるが、いずれも細片で器形を復元するまでには至っていない。深鉢の紋様は粗雑なものが多く、施文方向も斜位、縦位のものが多く見られる。時期を与えるならば縄文早期後半に位置するものであろう。また、深鉢の他に「壺」型の注口土器と思われる土器片をいくつか採集した。縄文早期の注口土器は、熊本県菊池郡大津町の瀬田裏遺跡において報告がなされている。瀬田裏遺跡では深鉢に穿孔したものと、古墳時代の遽に似た器形の土器に穿孔を施したものの2タイプが報告されているが、今回の報告で「壺」としたのは後者のほうである。また、今回出土した土器片では穿孔が確認できなかったため、積極的に注口土器土器とは言えないと判断し、「壺」と記したものである。

石製品は総数は少ないものの、石鏃が最も多く、これに削器、尖頭器が続く。石材のうち黒曜石であるが、質が悪く母岩は円礫のものが多く使われている。また、焼石についてであるが、安山岩を主とした火成岩が多く利用されている。この中には叩き石様の割れ、台石様の窪みを有するものがいくつも見られた。しかしながら火を受けたことによる割れとの区別がし難く、後述する志前田遺跡において、石組炉の中に多くの石が投入される形で廃棄されていることからこの時に剝離した可能性もあるため今回の報告では取り上げていない。

南筑後地域における縄文時代早期の遺跡の調査事例は多いものの、その有り様を比較しうる報告は少ないのが現状である。また、当遺跡も同時期の生活を追及しうる成果を上げるまでには至らなかった。該当時期の遺跡の調査報告例の増加が待たれるところである。

末尾に、多くの方々のご教示を受けながら、今回出土した縄文時代の遺物について、ただ並べただけで整理できずに終わったことを、ここに記してお詫びしたい。

【参考文献】

山崎 純夫・小畑 弘巳	『柏原遺跡群Ⅰ』	福岡市教育委員会	1983
藤方 勉	『瀬田裏遺跡調査報告資料Ⅱ』	大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団	1992
藤方 勉	『瀬田裏遺跡調査報告Ⅲ』	大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団	1993
山崎 純司	『無文土器』(『日本土器事典』)	瀬山園	1996
山崎 純司	『早水台式土器』(『日本土器事典』)	瀬山園	1996
新東 晃一	『壺ノ形式土器』(『日本土器事典』)	瀬山園	1996

## 第5節 <sup>しむら</sup>志前田遺跡の調査

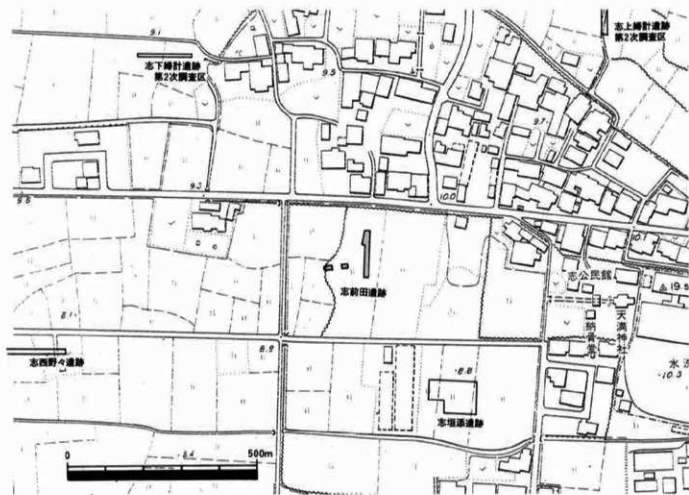


Fig.53 志前田遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)

### 1 調査概要

志前田遺跡は福岡県筑後市大字志字前田に所在する。志集落の南側、標高約8.5mの微高地上に位置し、東側には水洗小学校、志地区の氏神である天満神社（祭神は菅原道真）がある。調査前は水田や麦畑などの耕作地であった。調査は第9号支線排水路の建設に伴い掘削を受ける部分に対して行われたが、調査中に調査区西側で良好な形の石組み炉が確認され、この部分に対しての緊急調査も行われることとなった。緊急調査は1号炉（SK104）の周辺をW1区、2号炉（SK205）周辺をW2区とした。調査期間は1997年11月11日から始められたが、工事側との協議の結果、本格的に作業を開始したのは12月25日からであった。調査区本体とW2区は1998年1月31日、W1区は1号炉の取り上げのため1998年3月19日に調査を終了した。1号炉の取り上げは福岡県教育委員会九州歴史資料館学芸二課長の横田義章氏の指導により行われた。調査区からは溝、土壇、ピット群を、W1区とW2区からは縄文早期の石組み炉を検出した。

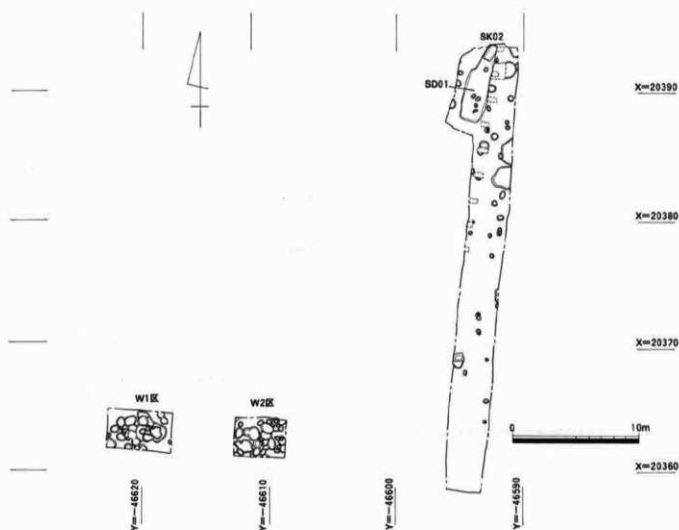


Fig.54 志前田遺跡全体図 (S=1/300)

## 2 遺構と遺物

### SD01 (Fig.55)

調査区北側で検出された溝で、検出面の上幅約0.90m～1.90m、下幅約0.88m～1.85m、深さ約0.15～0.20mを測る。ほぼ南北に走る溝で、断面形は浅い皿状をしている。土層の観察からは位置を左右に移動しながら最低3回の掘り直しが行われたと考えられる。床面からはSK02が検出された。SD01とは埋土状況も異なり、検出時点では確認できなかったことからSD01に切られた土壌であると考え

られる。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

#### SK02 (Fig.56)

SD01の床面から検出された隅丸長方形の土坑である。検出面での長軸約1.33m、短軸約0.73m、深さ約0.30m。主軸の傾きはN-35°-Eを測る。埋土は黒色土による単一土層で層で、土の締まり具合はSD01よりも柔らかい。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

#### W1区 (Fig.57)

前述のように今回の調査では調査区の西側に良好な形の石組み炉が2基確認され、緊急調査を行うこととなった。石組み炉はこの時点でかなり露出しており、圃場整備事業側の重機の移動により破壊される可能性が高かったためである。調査は石組み炉を中心にある程度の面を検出することから始められた。W1区は1号炉 (SK104)の周囲東西4m、南北3mの幅でこれを行い、1号炉の他に数基の石組み炉と思われる土坑を確認した。この土坑群の埋土からはいずれも炭化物は確認されていない。

また、方位と主軸の傾きは航空測量図と遺構配置図との間にズレが生じたため、あえて記していない。

#### 1号炉 (SK101・Fig.58)

円形の石組み炉で、内側に石を投げ込まれた形で確認された。直径約0.70m、深さ約0.10mを測る。石材は安山岩、玄武岩質の河原石が使われており、いずれも火を受け赤色化している。

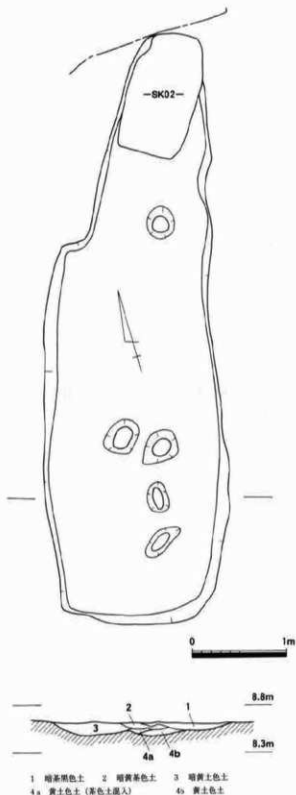


Fig.55 SD01 (S=1/40)

SK101 (Fig.58)

1号炉の北西側に位置する楕円形の土壌で、南側を小ビットに切られている。検出面での長軸約0.75m、短軸約0.62m、深さ約0.13mを測る。

この土壌からは数個の焼石と土器片を出土した。これらは床面から浮いた形で出土しており流れ込みの可能性が高い。土器片 (Fig.60-1) は磨滅が激しいが楕円文を横走させた押型文土器である。

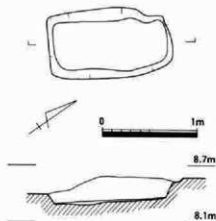


Fig.56 SK02 (S=1/40)

SK102 (Fig.58)

1号炉の西側で検出された楕円形の土壌で、北側をビットに切られている。検出面での長軸約0.70m、短軸約0.60m、深さは約0.15mを測る。

この土壌からは焼石が出土したが完全に中に浮いており、後からの流入品である。

SK103 (Fig.58)

1号炉の北側で検出された楕円形の土壌で、南側を1号炉に切られている。検出面での長軸約0.65m、短軸約0.55m、深さ約0.10mを測る。

この遺構からは焼石と数個の土器片を出土した。これらは後の流入品であると考えられる。土器片の内、実測しえたのは1点だけある。Fig.60-2は押型文土器の小破片である。磨滅が進んでいるが、楕円文を横位に近い斜位に施文している。

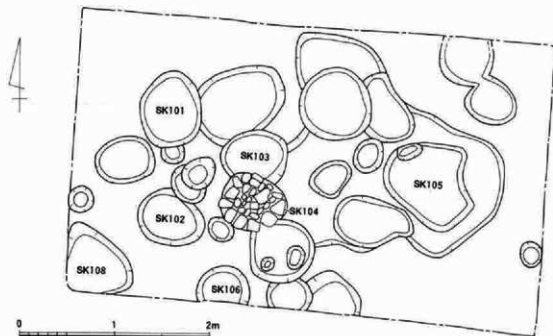


Fig.57 W1区 (S=1/40)

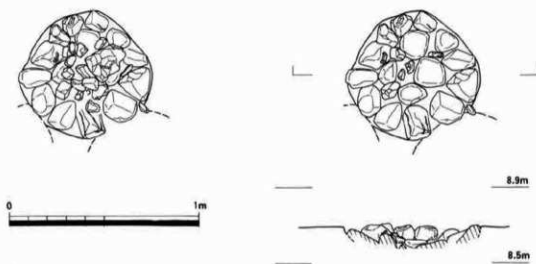


Fig.58 1号炉 (S104) (S=1/20)

SK105 (Fig.59)

1号炉の東側で検出された不定形の土壌である。数ヶ所に窪みを有するが、これは植物の根痕である。検出面での長軸約1.00m、短軸約最大約0.90m、深さ約0.05mを測る。

この土壌からはいくつかの焼石が出土しているが、いずれも遊離した状態での出土である。この土壌は石組み炉ではない可能性の方が高い。

このほかに1号炉の南側に位置するSP106からは縄文土器片が出土している (Fig.60-3)。外面に楕円文を斜位に施文された押型土器で、内面はケズリが施されている。

W2区 (Fig.61)

2号炉 (S205) を中心に東西5m、南北3mで設定された調査区である。調査は遺構の検出から行われ、多くの土壌が確認された。この中には石組み炉と思われるものがいくつか見られるが、焼石を良好な形で残しているものは2号炉以外には認められなかった。

2号炉 (S205・Fig.62)

1号炉と同じく焼石を投げ込まれた形で検出された土壌で、西側のSK202に切られ、南側のSK206を切っている。炉内部の壁面を構成したと思われる石材は良好な形で残っていたが、底面に石材は見られなかった。また、石材から想定されるプランと掘り方が一致しておらず、東側に弧を描くような形で焼石が配置されている。プランの検出を間違えた可能性がある。調査時点での上幅約1.05m、下幅約0.85m、深さ約0.20mを測る。焼石の素材は1号炉と同じく安山岩、玄武岩質の河原石である。

この遺構からの焼石以外の遺物の出土はみられなかった。



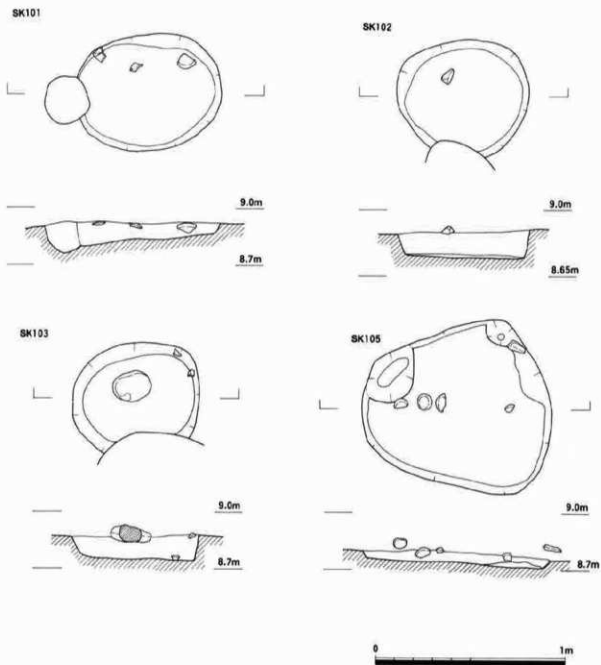


Fig.59 W1区烧石出土土壤 (S=1/20)



Fig.60 W1区出土遺物 (S=1/3)

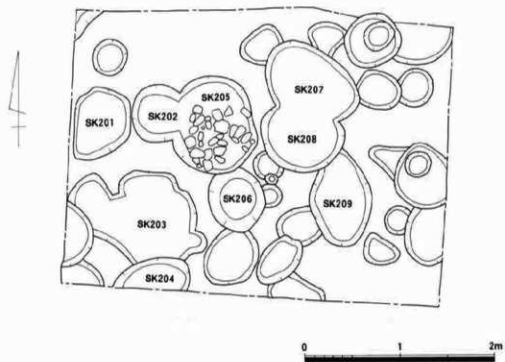


Fig.61 W2区 (S=1/40)

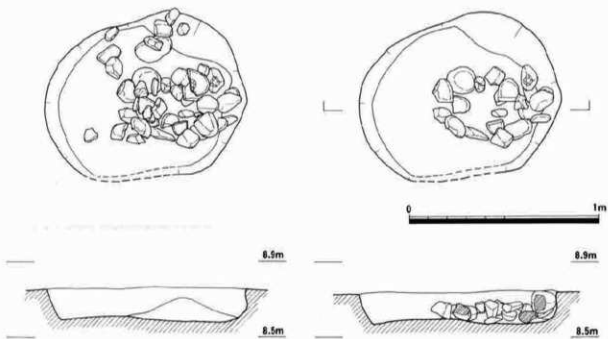


Fig.62 2号冢 (S205) (S=1/20)

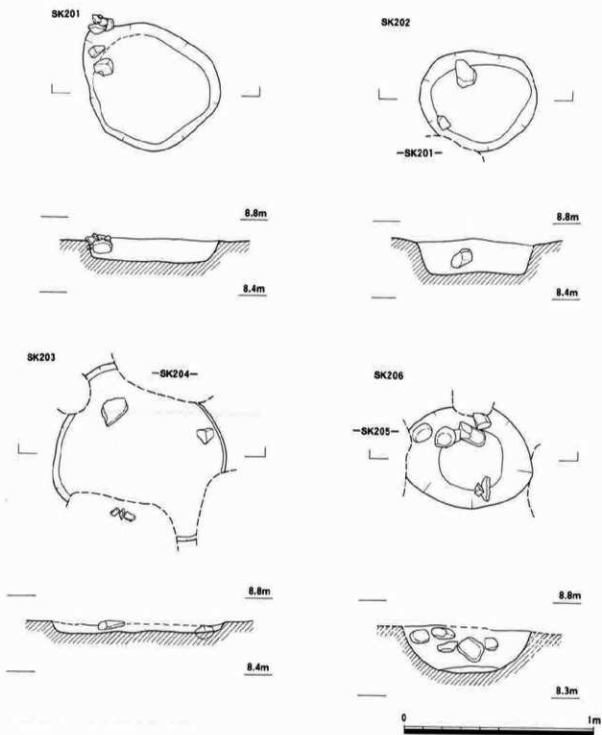


Fig. 63 W 2 区焼石出土土壌 1 (S=1/20)

2号炉の西側に位置する不定形土壌で、最大径0.75m、短軸約0.62m、深さ約0.12mを測る。出土遺物としては焼石、縄文土器片がある。土器片は磨滅が激しく、実測できなかった。

SK202 (Fig.63)

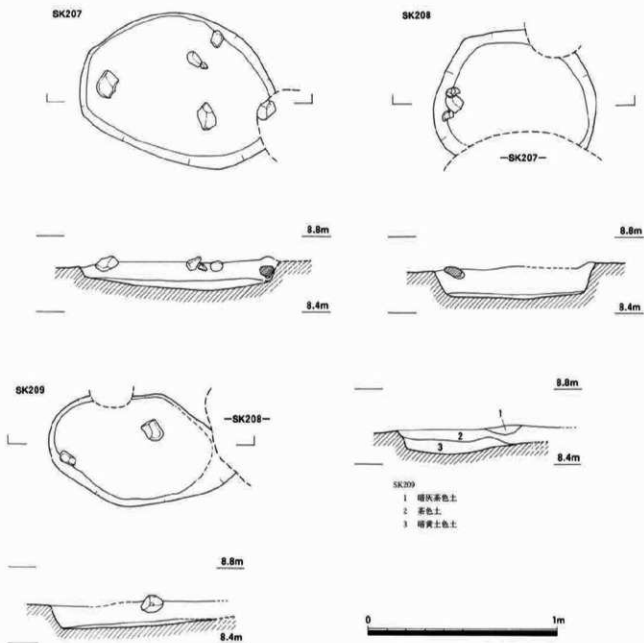


Fig. 64 W2区焼石出土土壌 2 (S=1/20)

2号炉の西側に位置する楕円形の土壌で、西側のSK201に若干切れ、東の2号炉を切っている。検出面で長軸約0.60m、短軸約0.53m、深さ約0.17mを測る。

この遺構からは数個の焼石が出土したが、いずれも壁面に張り付くような形で検出された。

#### SK203 (Fig. 63)

2号炉の南側に位置する土壌で、南側のSK204に、その他の部分も小土壌やピットに切られており、遺存状況は良くはない。現状での法量は長軸約0.90m、短軸は復元で約0.80m、深さ約0.05mを測る。

この遺構からは焼石と縄文土器片を出土した。縄文土器 (Fig. 65-1) は燃糸土器と思われるが、焼きが非常に悪く壊れやすいものである。

#### SK204 (Fig. 61)

SK203の南側に位置する土壌である。調査区の南側に更に広がるものであったが、今回の調査は1号炉、2号炉の記録保存が目的であるため調査区を広げての調査は行わなかった。

この土壌からは縄文土器片が出土している (Fig. 65-2・3)。2は熱糸文土器の胴部破片、3は楕円文を施した深鉢の口縁部で、内面は横走施文、外面は縦走施文が施されている。

#### SK206 (Fig. 63)

2号炉の南側に位置する土壌で、北側をSK205に、東側をビットに切られている。検出面での法量は長軸復元径で約0.70m、短軸復元径約0.55m、深さ約0.25m、断面形はボウル状をしている。

出土遺物には焼石と石鏃がある。焼石は壁面に張り付くような形で残っており、底面には残っていなかった。石鏃 (Fig. 65-4) は質の悪い石材を使用した三角鏃である。

#### SK207 (Fig. 64)

2号炉の東側に位置し、南側のSK208を切るが、北西部分ををビットに切られている。本来は楕円形をした土壌だと考えられ、復元での長軸約1.05m、短軸最大で約0.77m、深さ約0.15mを測る。

この土壌からは数個の焼石が出土しているが、後からの混入である可能性が高い。

#### SK208 (Fig. 64)

2号炉の東側に位置する土壌で、北のSK207、南側のビットに切られている。現状での法量は長軸約0.85m、短軸は復元で約0.70m、深さは0.17mを測る。

この土壌からは数個の焼石が壁面に張り付くような形で出土している。

#### SK209 (Fig. 64)

2号炉の東側に位置する土壌で、北側をSK208、西側をビットに切られている。楕円形の土壌で法量は長軸復元で約1.00m、短軸は最大で約0.57m、深さは0.15mを測る。埋土は茶色から暗黄色を経て地山土の黄褐色土へと変化する。この傾向は今回報告する志地区の全ての縄文土壌に同じように見られる変化である。

この土壌からは数個の焼石を出土している。土層図の2層と3層の分層面の高さと同焼石の検出面がほぼ一致しており、本来はこの面が遺構の下場であったことを示している。

#### その他の出土遺物 (Fig. 66・67)

志前田遺跡の周辺からは縄文土器、石器、須恵器、土師器、陶器などが採集されている。

縄文土器には楕円文 (Fig. 66-1-6)、熱糸文 (Fig. 66-7-9) の2種類が見られる。楕円文に限っては、志西野々遺跡のそれよりも緻密な紋様が施されている。

石器はいずれも石鏃 (Fig. 67) である。

須恵器には坏の胴部破片が見られるが、実測しうるものではない。

土師器には脚付盤 (10) と土師皿 (11) がある。盤は円柱状の脚部を張り付けたものである。

陶器には碗 (Fig. 66-12) がある。胎土は灰色で内面に黒色釉を、外面は焼き締めによる赤錆色をしている。激しい磨滅を受けている。

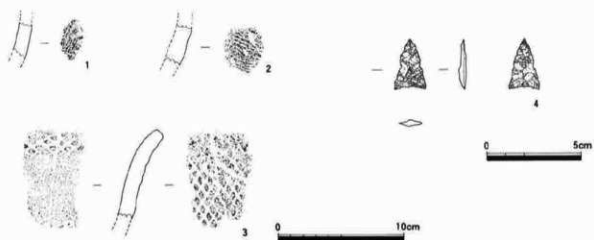


Fig.65 W2区出土遺物 (S=1/3・1/2)

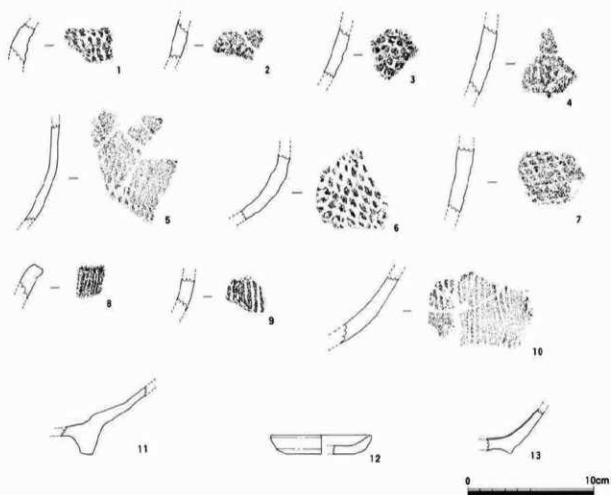


Fig.66 その他の出土遺物 1 (S=1/3)



Fig.67 その他の出土遺物 2 (S=1/2)

### 3 1号炉取り上げ作業

志前田遺跡は期日を1月末日と定めて作業が進められていたが、若干の遅れが生じ、1月31日の時点で1号炉の調査を残した状態であった。

2月、現場の途中経過の報告の際に保存状態の良い石組み炉(1号炉)の存在を福岡県南筑後教育事務所の小田和利氏に報告したところ、これを保存して展示してはどうかという提案がなされた。この提案を受けて筑後市教育委員会では1号炉を切り取り、保存・展示することとなり、福岡県立九州歴史資料館学芸二課長の横田義章氏に取り上げの際の指導を依頼した。横田氏はこれを快諾して頂き、1998年3月6日、これを実施することとなった。

切り取り作業は発砲ウレタン(商品名:ソフランR原液P、ソフランR原液R。東洋ゴム株式会社製)を用いた方法で行われた。現場での作業は以下の手順で行われた。

#### (1) 遺構の削り出し

作業は1号炉の周囲(底部も含む)をある程度削り込むことから始められた。作業がある程度進んだところで遺構の周囲にヒビ割れが生じ始めたため、土のう袋とロープによりこれを補強し、作業をさらに進めた。

#### (2) 遺構面の保護

削り込みがある程度まで終了した時点で、画仙紙とガーゼにより遺構面の保護を行った。まず、画仙紙により石材の表面と石材間の充填を行った後、これをガーゼで被うことにより遺構面の保護とした。

#### (3) 遺構の固定

その後、段ボールにて周囲を取り囲み、発砲ウレタンを段ボールと遺構のすき間に流し込み、遺構の固定を行った。周囲の固定が終了した後に遺構上面に発砲ウレタンを流し込み、同時にこれに蓋をして遺構面の固定を完了した。

#### (4) 遺構の切り取り作業

あらかじめ制作しておいた木枠により1号炉をさらに囲い込み、生じたすき間に再び発砲ウレタンを流し込み1号炉を固定した。1号炉の上面に更に発砲ウレタンを流し込み固定を終了した後、遺構を反転させて遺構の切り取りを完了した。その後底部に生じた孔より余計な土をかき出す作業を行っ

た。これは軽量化と補強のためである。その後このすき間に再び発砲ウレタンを流し込み遺構を底面より補強し現場での作業を終了した。

現場からの搬出は日を改めた1998年3月16日に行われ、現場での作業を終了した。

#### (5) 遺構の補強

1998年秋、1号炉の展示に向けての作業が行われた。周囲を取り囲んでいた木枠と遺構面を被っていた発砲ウレタンなどを取り除いた後、1号炉の補強のためにバインダーNo.17の希釈液を塗布した。補強後、周囲の余分なウレタンを削り込み、展示用の木枠にはめ込み作業を終了した。

現在1号炉は筑後市大字水田にある筑後市郷土資料館に展示、公開されている。

## 4 小結

志前田遺跡からは溝、土塼、多数のビット群を検出したが、遺物は皆無であった。SD01はビニールハウスのものと思われる基礎の配列土塼を切っており、現代の遺構といえる。SK02については考察しうる資料が少なく、SD01よりも古いとしか言いようがない。

また、調査区の西側で確認された縄文早期のものと思われる石組み炉が確認された時点で、本調査区の東側にも小さな調査区を1区画設定し調査を行ったが何らの遺構も確認されなかった。志西野々遺跡の報告の中で、志前田遺跡が縄文遺物包含層の東限であるとしたのはこの結果を受けてのものである。また志前田遺跡の南東部に位置する志垣添遺跡でも縄文早期の遺構・遺物が出土していないのはこのことを裏付けている。破片資料のため断言できないが、縄文早期の押型文土器は、志西野々遺跡のものとは若干異なった特徴を持っており、両者の間に時間的な差があることを示しているのかもしれないが、大きくは縄文早期後半を出ないものだと考えている。





## 第4章 考 察

### 筑後市内における縄文早期遺跡

筑後市内における発掘調査事例は近年立て続けに行われた圃場整備事業に伴い急激に増加し、150例を超える調査数を数えるほどになっている。この中で縄文早期の遺跡としては、早くに報告がなされた上北島の裏山遺跡が知られているにすぎない。ここでは市内で調査が行われた縄文早期の遺跡について紹介して行きたい。しかしながら落し穴遺構のみを検出した遺跡については時期の断定ができないため、今回の報告の中から除外している。また、多くが整理作業中のものであり、内容は概説程度に止めておく。市内の縄文遺跡は八女丘陵の南、矢部川により形成された扇状地上に集中する傾向を示している（Fig.68・69）。これは近隣の八女市にも言える特徴であり、早くから多くの研究者によって指摘されてきたことである。一方、標高7m以下の低湿地地帯では、現時点では調査例が少なく、同時期の遺跡を見ることができない。

#### 1) 裏山遺跡（上北島裏山遺跡）

筑後市大字上北島字裏山に所在する裏山遺跡は、筑後市・南筑後地域を代表する縄文早期の遺跡として有名であり、昭和41年（1966）に調査概報が出版されている。しかしながら、その後の諸事情により本報告がなされないうまま現在に至っている。

裏山遺跡の発見は昭和29年（1954）に遡り、岩崎光氏により行われている。正式な調査時期は不明だが、このときは柱穴、石組み炉（概報では敷石炉）、押型文土器、打製石器、石錐、石棒が出土している。

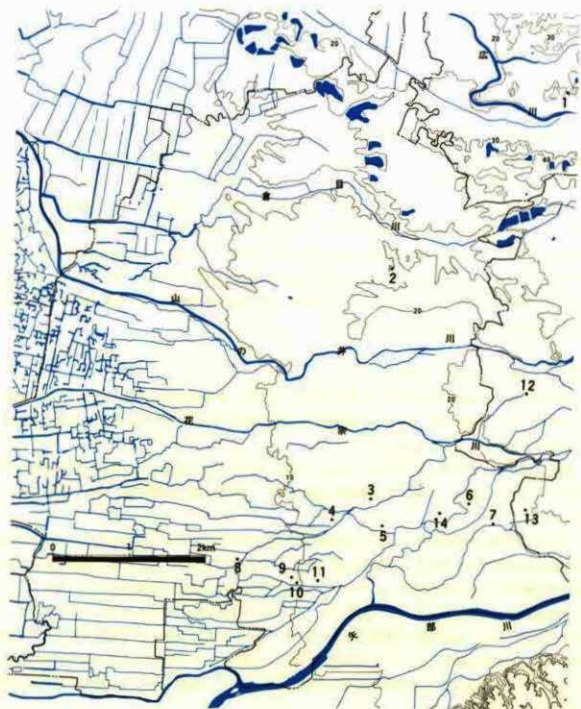
正式な発掘調査は昭和37年（1962）に筑後郷土史研究会の正式事業として行われた。途中八女市亀甲遺跡の調査のため中断があるが昭和38年（1963）8月に調査を再開、縄文早期の遺物の他に、弥生時代終末期の竪穴式住居が調査されている。この時の調査成果は前述の概報にまとめられている。

裏山遺跡はその後史跡公園として整備され、竪穴式住居の復元なども行われた。しかしながら、周辺宅地化に伴い、地域住民の要望により平成2年（1990）通常公園として整備され、その後保安面を考慮して街灯が設置された。上北島裏山遺跡第2次調査とされるものはこの公園化の際に行われた遺跡の状況を確認するための緊急調査であり、「筑後市史」に掲載されている遺物もこの時に採集されたものである（Fig.70）。

裏山遺跡出土の押型文土器は志遺跡群で採集された押型文よりも精緻な紋様が施されているように見受けられるが、2次調査で採集された資料はその数量が少なく、結論づけるには問題が残る。今後の地域史の解明のためにも昭和30年代に行われた第1次調査の正式報告がなされることが期待される。

#### 2) 大地田遺跡

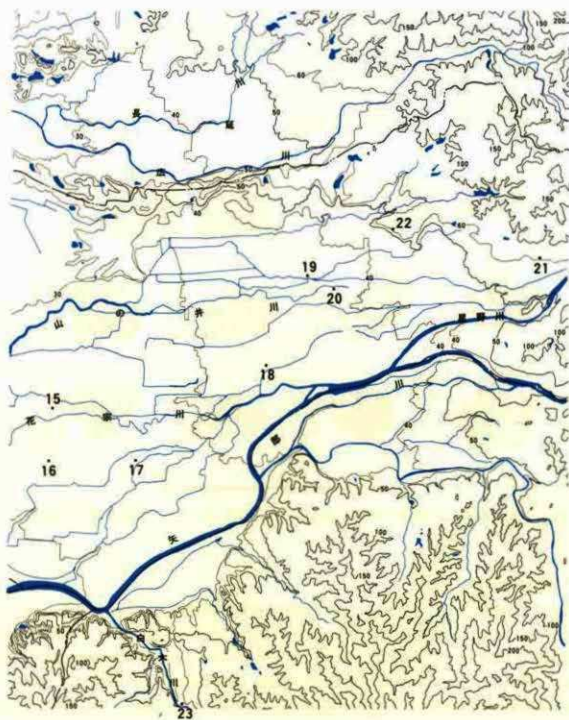
筑後市大字久恵字大地田に所在する。調査は昭和45年（1970）九州縦貫自動車道の建設に伴い、福岡県教育委員会により実施された。ここは黒曜石の分布地として調査対象地に上げられていたものである。調査の結果楕円文土器2点（Fig.71）が出土している。調査を行った福島邦宏氏の報告によれば、これらは矢部川氾濫時の混入品とのことである。



(承認番号 平 12九後、第69号)

- |           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|
| 1 広川平原遺跡  | 2 前津中ノ玉遺跡 | 3 鶴田牛ノ池遺跡 |
| 4 養山遺跡    | 5 鶴田早田遺跡  | 6 久志中野遺跡  |
| 7 大池田遺跡   | 8 常尾長田遺跡  | 9 志西田遺跡   |
| 10 志西野ノ遺跡 | 11 志麻田遺跡  | 12 緑竹遺跡   |
| 13 大森田遺跡  | 14 新瀬田遺跡  |           |

Fig. 68 筑後市周辺の縄文早期 (石組瓦・押型土器出土) 遺跡位置図 1 (S=1/50,000)



(承認番号 平 12九報, 第70号)

15 空野六反田遺跡  
18 水町遺跡  
21 東野遺跡

16 同此大坪遺跡  
19 水尾遺跡  
22 立山遺跡

17 池上遺跡  
20 尺取遺跡  
23 白水西原遺跡

Fig. 69 筑後市周辺の縄文早期 (石組炉・押型文土器出土) 遺跡位置図 2 (S=1/50,000)

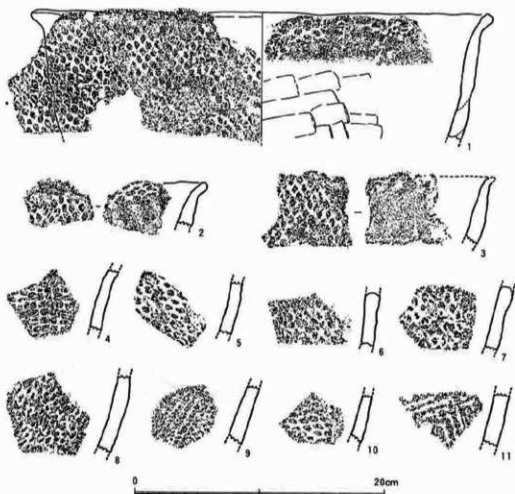


Fig.70 裏山遺跡（上北島裏山遺跡第2次調査）出土遺物（S=1/3・『筑後市史』より転載）

### 3) 新湊丸田遺跡

筑後市大字新湊字丸田に所在する。調査は県営圃場整備事業筑後東部地区の実施に伴い平成5年（1993）に行われた。この調査で縄文土器が4点ほど報告されている（Fig.72）が、石器とともに全て表土からの出土である。土器に関しては1点が早水台式とされているが、外面に縦走施文がなされており、時代はもう少し下るのではないかと考えられる。他の3点は志西野々遺跡のものに似通っており、同時期のものではないかと考えている。共伴石器は石鏃、削器、石核、2次加工石器がある。

### 4) 鶴田岸添遺跡

筑後市大字鶴田字岸添に所在する。県営圃場整備事業東部地区に伴い実施されることとなった。調査は4次にわたり行われたが、今回取り上げるのは第2次調査区である。第2次調査区は平成6年（1994）に調査が行われている。

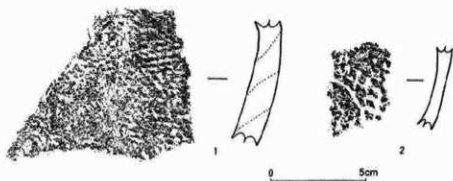


Fig. 71 大地田遺跡出土遺物 (S=1/2・報告書より転載)

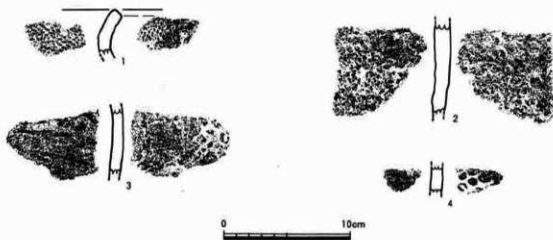


Fig. 72 新溝丸田遺跡出土遺物 (S=1/3・報告書より転載)

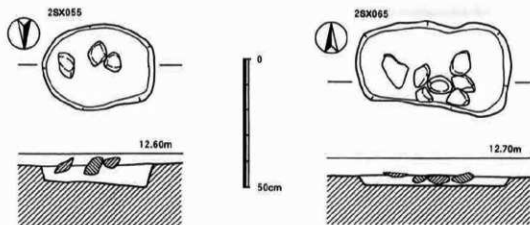


Fig. 73 鶴田岸添遺跡第2次調査区焼石出土土壘 (S=1/15・報告書より改変・転載)

調査区の中で目を引くのは多数の落し穴遺構と弥生時代終末期の方形堅穴式住居跡である。ここに石組み炉と思われる焼石出土土壌が2基確認されている (Fig.73) が、報告書の中ではその位置が明示されていない。石組み炉と落し穴遺構がここまで近接して存在する例は市内ではここ以外には見られない。石組み炉は両者とも方形プランを意識したものと考えている。これらの遺構からは遺物は出土しておらず、周辺からも縄文時代早期を思わせる土器片、石器剥片などは出土していない。しかしながら、調査担当者はこれを縄文早期の遺構であると認識している。

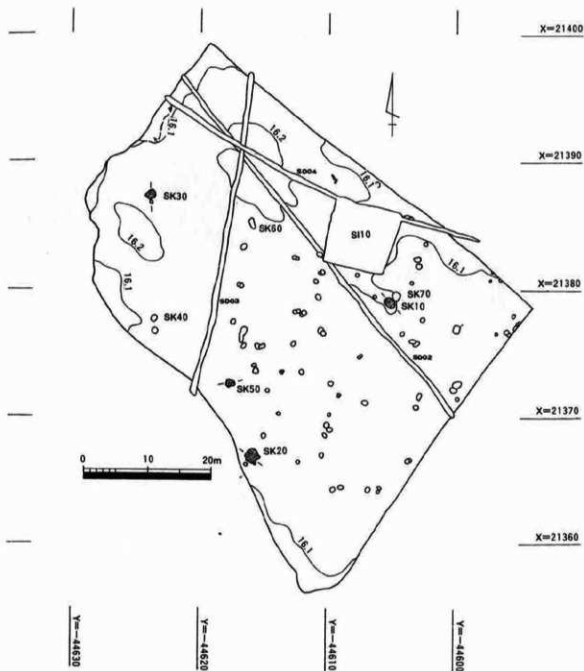


Fig.74 久恵中野遺跡B区 (S=1/600)

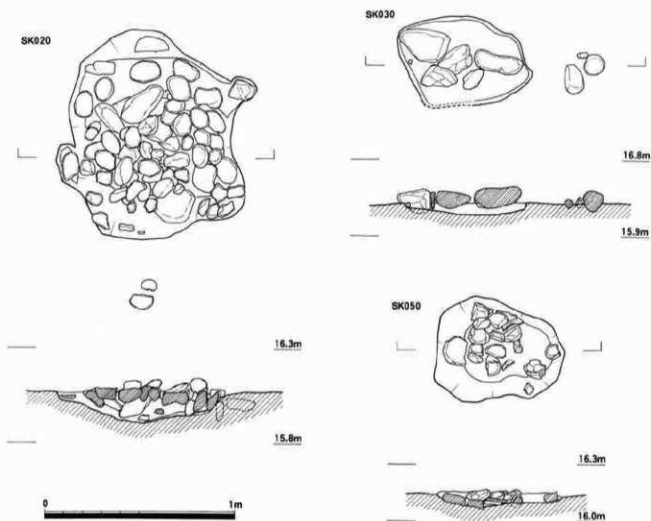


Fig.75 久恵中野遺跡B区石組み炉 (S=1/20)

#### 5) 久恵中野遺跡 (Fig.74)

筑後市大字久恵字中野に所在する。県営圃場整備事業東部地区の実施に伴い平成7年(1995)に調査が行われた。調査はA区、B区の2カ所にまたがり、双方から石組み炉を検出している。現在調査担当者が不在のため、A区の詳しい状況は不明だが、B区で検出された石組み炉は確認しうる範囲では方形を基本としたプランを有している (Fig.75)。土器は未整理であるが、石組み炉の周辺から磨滅の激しい縄文土器が採集されている。調査担当者は縄文早期から前期という幅広い時期をこれに与えている。

#### 6) 常用(北)長田遺跡

筑後市大字常用字長田に所在する。調査は2次にわたり、石組み炉は第2次調査区で検出されている。第2次調査は県営担い手育成基盤整備事業西部第2地区の実施に伴い平成9年(1997)にかけて行われている。遺構配置図や記録写真から方形プランを基本としたものと判断される。調査担当者によると、この遺構の時期を特定できるような遺物の出土は無く、使用されている石材は志遠跡群のそ



れよりも小さかったとのことである。

#### 7) 前津中ノ玉遺跡

筑後市大字前津字中ノ玉に所在する。平成9年(1997)に行われた第2次調査では、縄文土器3点を出土した。この遺跡は市の中央部に位置する前津丘陵の標高約20m前後の高所に位置し、市の南部に位置する遺跡群とは異なる立地状況を有している。このような周辺よりも高い丘陵上に生活の痕跡を残している遺跡は近隣では八女郡広川町の広川平原遺跡(標高31m)、八女市の立山遺跡(標高60-80m)、山門郡立花町の白木西原遺跡(標高約40m前後)などを挙げることができよう。

縄文土器はいずれも押型文土器である(Fig.76)。SI040から採集された2点(1・2)は横走施文が施されており、志地区遺跡群のものよりも古い様相を有している。一方、遺構面を被っていた茶褐色土中から出土した1点(3)は志西野々遺跡出土のものに類似している。この調査では縄文時代の遺構として落し穴状遺構が1基確認されているが、縄文早期のものとは言えないとのことである。

#### 8) 志西田遺跡

筑後市大字志字西田に所在する。調査は平成10年(1998)に行われた。志西野々遺跡の北側に位置し、今回報告した縄文遺物包含層の周辺部にあたる。ここでは縄文土器のほか落し穴遺構が検出されている。縄文土器は志西野々遺跡のものと同様類似している。

#### 9) 鶴田東牛ヶ池遺跡

筑後市大字鶴田字東牛ヶ池に所在する。調査は平成10年(1998)に2回実施された。筑後市の南西部、志遺跡群の北東に位置し、標高約14mの微高地上に位置している。

第1次調査区では遺物包含層から黒曜石剥片などと共に押型文土器が出土した。

第2次調査区からも押型文土器が出土している。

#### 10) 鶴田牛ヶ池遺跡

筑後市大字鶴田字牛ヶ池に所在する。調査は平成10年から11年(1998-1999)にかけて調査が行われており、調査回数も5次に及んでいる。鶴田牛ヶ池遺跡は志遺跡群の北東側に位置し鶴田東牛ヶ池遺跡と隣接する、標高約14m前後の微高地上に立地している。

第1次調査区では石組み炉と押型文土器、石器を検出している。

第3次調査区では押型文土器と石器を検出している。

第4次調査区においても縄文時代の土壌、縄文土器、石器などが見られた。

第5次調査では集石遺構、押型文土器片、黒曜石片、サヌカイト片が採集されている。

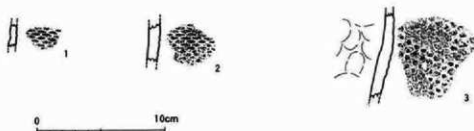


Fig.76 前津中ノ玉遺跡第2次調査区出土遺物(S=1/3・報告書より転載)

縄文早期の遺跡群から出土する押型土器は、細片ばかりでその形式などを特定するには至らないが、確認できた範囲だけで述べるならば斜走施文のものが多く、早期後半に所属するものと考えられる。また何地点かで確認された石組み炉は、日形プランを持つものと方形プランを持つものの2つに大別されるが、整理作業途中の遺跡が多く、土器を比較検討できなかった。ためにこのことが時期差を持つことを示すものなのかは結論がでない。このことに関しては今後も検討してゆきたい。

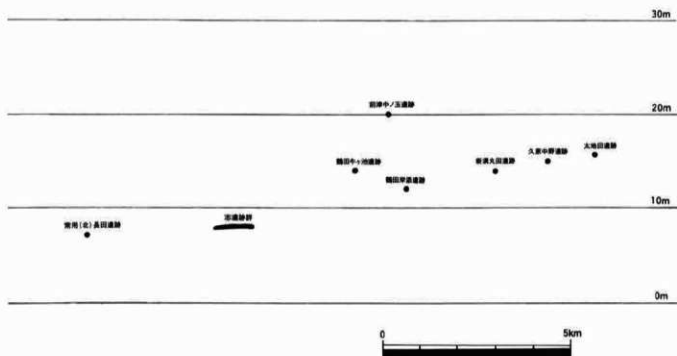


Fig. 77 筑後市内縄文早期遺跡位置模式図

【参考文献】

- |             |                                 |               |
|-------------|---------------------------------|---------------|
| 岩崎 光        | 【東山遺跡調査概報】                      | 筑後市教育委員会 1966 |
| 藤島 邦弘他      | 【九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 Ⅰ】         | 福岡県教育委員会 1970 |
| 栗原 和彦他      | 【九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 Ⅱ】         | 福岡県教育委員会 1971 |
| 西谷 正 他      | 【九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 Ⅲ】         | 福岡県教育委員会 1972 |
| 佐田 茂・伊崎 俊秋他 | 【Zaluzik墳群】                     | 八女市教育委員会 1983 |
| 赤崎 敏男他      | 【八女市南区地区第3宮崎場整備事業地内埋蔵文化財調査概報】   | 八女市教育委員会 1989 |
| 奥田 昌史他      | 【八女市南区地区第3宮崎場整備事業地内埋蔵文化財調査概報 Ⅱ】 | 八女市教育委員会 1990 |
| 赤崎 敏男他      | 【八女市南区地区第3宮崎場整備事業地内埋蔵文化財調査概報 Ⅲ】 | 八女市教育委員会 1992 |
| 筑後市教育委員会・編  | 【筑後東照地区遺跡群 Ⅰ】                   | 筑後市教育委員会 1994 |
| 伊崎 俊秋・水ノ江和同 | 【白木西原遺跡 Ⅰ】                      | 立花町教育委員会 1994 |
| 筑後市教育委員会・編  | 【筑後東照地区遺跡群 Ⅱ】                   | 筑後市教育委員会 1995 |
| 伊崎 俊秋他      | 【白木西原遺跡 Ⅱ】                      | 立花町教育委員会 1995 |
| 大塚 憲治       | 【第3宮崎場活性化環境整備事業地内埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅲ】 | 八女市教育委員会 1995 |
| 赤崎 敏男他      | 【八女東照地区埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅱ】           | 八女市教育委員会 1996 |
| 赤崎 敏男他      | 【八女東照地区埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅲ】           | 八女市教育委員会 1997 |

筑波市史編さん委員会編

上村 英士

柴田 剛

【筑波市史】

【前洋中ノ玉造跡 Ⅲ】

【らくご遺跡だより Vol.12】

筑波市史編さん委員会 1998

筑波市教育委員会 1999

筑波市教育委員会 1999

Tab. 2 志下婦計遺跡第1次調査区出土陶磁器一覧表

Fig.-No.	出土遺物	種類	器種	口径	直径	器高	保存部位	残存率	焼成	色 調	胎 土	備 考
12-1	S1007	磁器	碗	71.0	4.2	3.0	口縁部	良好	良好	乳白色		染付(コバルトブルー)
12-2	S1007	磁器	碗	79.6	**	**	口縁部	良好	良好	乳白色		染付(明青色の残痕)
14-1	S1009	陶器	**	**	**	**	底底	良好	良好	赤褐色	雑質	内面施釉(赤緑釉)
15-1	S1008	磁器	高炊	79.4	7.2	4.7		1/2	良好	乳白色		プリント
15-2	S1008	磁器	碗	71.0	**	**	口縁部	良好	良好	乳白色		施釉(若干青味がかった透明釉)

Tab. 3 志下婦計遺跡第1次調査区出土木器一覧表

Fig.-No.	出土遺物	種類	長さ	幅	高さ	保存部位	残存率	素材	備 考
12-3	S1007	7.軸	12.7	11.2	4.7-4.8		完全	桐?	

Tab. 4 志下婦計遺跡第1次調査区出土銭貨一覧表

Fig.-No.	出土遺物	時代	種類	径	厚さ	備 考
17-1	銭貨収集	江戸時代	寛永通寶	2.4	**	

Tab. 5 遺跡第2次調査区志下婦計出土土器一覧表

Fig.-No.	出土遺物	種類	器種	口径	直径	器高	保存部位	残存率	焼成	色 調	胎 土	備 考
21-1	銭貨収集	瓦器	鉢	**	**	**	口縁部		不良	内面淡乳灰色 外面淡灰褐色	ほぼ良	

Tab. 6 志野野々遺跡出土土器一覧表

Fig.-No.	出土遺物	種類	器種	口径	直径	器高	保存部位	残存率	焼成	色 調	胎 土	備 考
27-1	S1011	土器類	土鍋	**	**	**	口縁部	良好	良好	褐色	1~2cm大の砂粒を多く含む。	
27-2	S2001	土器類	土鍋	**	**	**	口縁部	良好	良好	1~2cm大の砂粒を少し含む。		
27-3	S1005	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	良好	黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む。 雲母片あり。	外面に縄文施文。内面ナメリ。
29-2	S1005	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	赤褐色。内面は褐色	砂粒多い(3mm大含む)。	内面外目に1印文施文。内面ナメリ。	
29-3	S1005	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	赤褐色。内面は褐色	3mm大の砂粒多い。	内面外目に2次刷文。	
29-4	S1005	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	赤褐色	3mm大の砂粒多い。	外面に1印文施文。内面ナメリ。	
29-11	S1005	土器類	柄	**	**	**	口縁部	良好	良好	褐色	3mm大の砂粒多い。	
29-5	S1005	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	黄褐色	3mm大の砂粒多い。	外面に縄文施文。内面1オキ?	
29-6	S1007	縄文土器	**	**	**	**	胴部	不良	淡黄褐色	微細砂粒、微細雲母片多い。	外面に刷文?	
29-7	S1007	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外面赤褐色。	1~2cm大の砂粒を多く含む。 内面黄灰色一褐色	外面に刷文。 カンタン石粒を多く含む。	
29-8	S1007	縄文土器	**	**	**	**	口縁部以下	良好	外面赤褐色	1~2cm大の砂粒を多く含む。 内面黄灰色	外面に縄文施文。 内面刷付赤褐色。	
29-9	S1007	遺器類	坏尊	**	**	**	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	3mm大の砂粒を多く含む。	
29-10	S1007	遺器類	坏	**	**	**	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	3mm大の砂粒をわずかに含む。	
29-12	S1007	土器類	坏	**	**	**	口縁部	良好	外赤褐色。内面黄褐色	黄褐色	3mm大の砂粒を多く含む。	外面ナメリ。
29-13	S1007	土器類	坏	**	**	**	底底	1/8	良好	淡褐色	雑質	
29-14	S1007	土器類	皿	**	7.6	**	底底	1/8	良好	淡黄色	1mm大の砂粒をわずかに含む。 赤色粒子が多く見られる。	
29-15	S1007	土器類	皿	**	7.5	**	底底	良好	淡褐色	雑質		最大径1.5cm
31-1	SK024	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	やや良	外面赤褐色	3mm大の砂粒を多く含む。	外面1~1.5cm大の刷文(刷文)	
31-2	SK030	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	褐色	3mm大の砂粒多い。 カンタン石を多く含む。	外面に縄文施文(波状あり)。 内面ナメリ。	
31-3	SK030	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	外面黄褐色 内面黄土色	3mm大の砂粒多い。 カンタン石を少し含む。	外面ナメリ。 外面に施文。その下に1印文施文。 (3オキ 型土器?)	
31-4	SK032	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	不良	黄褐色	3mm大の砂粒多い。 (3~5mm大のもの含む)。 カンタン石が多い。	外面に1印文施文。 内面ナメリ。	
31-5	SK030	縄文土器	**	**	**	**	口縁部以下	良好	赤褐色	3mm大の砂粒を多く含む。 カンタン石を多く含む。	外面に施文。 内面に縄文施文。	
31-6	SK018	縄文土器	**	**	**	**	胴部	やや良	黄褐色	3mm大の砂粒を多く含む。 カンタン石を多く含む。	最大径1.5cm施文。 外面に縄文施文。	
31-7	SK024	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外面褐色。内面黄褐色。	2mm大の砂粒多い。 微細カンタン石多い。	外面に縄文施文。 内面ナメリ。	
31-8	SK030	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外面褐色。内面褐色	3mm大の砂粒多い。 カンタン石を多く含む。	外面に1印文。 内面に施文。	
31-9	SK018	縄文土器	**	(天部)	**	**	底底	良好	外面黄褐色 内面黄灰色	1~2cm大の砂粒を多く含む。 カンタン石を多く含む。	縄文施文。	
31-10	SK018	縄文土器	**	(丸部)	**	**	底底	やや良	外面褐色一褐色 内面赤褐色	細い砂粒多い(5mm大)。 カンタン石を多く含む。 黒曜石粒も見られる。	わずかに刷文が見られる。	
36-1	SK089	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	赤褐色	雑質	3mm大の砂粒を多く含む。	縄文土器
36-2	SK089	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外面黄褐色 内面淡赤褐色	カンタン石を少し含む。 1~2cm大の砂粒多い。	外面に縄文施文の カンタン石を多く含む。	
36-3	SK107	縄文土器	**	**	**	**	胴部	やや良	外面赤褐色 内面褐色	3mm大の砂粒を多く含む。 カンタン石を多く含む。	刷文ナメリ	
37-2	SK102	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む。 カンタン石を多く含む。	外面に大印文(施文多あり)。 内面に施文。下部ナメリ。	
37-3	SK102	縄文土器	**	**	**	**	胴部	不良	外面淡褐色 内面黄褐色 内面褐色	3mm以下の砂粒多い。	外面に大印文の カンタン石を多く含む。	
37-4	SK102	縄文土器	**	**	**	**	口縁部以下	良好	外面黄褐色 内面黄灰色	1~2mm大の砂粒を多く含む。	外面に大印文(刷文施文)。 赤子のカンタン石を含む。	
37-5	SK108	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外面赤褐色 内面黄灰色	1~2mm大の砂粒を多く含む。	(山印文) カンタン石を多く含む。	
37-6	SK108	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外面赤褐色 内面黄土色	1~2mm大の砂粒を多く含む。	外面に刷文施文。 雲母片が多い。	
37-7	SK108	縄文土器	**	**	**	**	胴部	不良	黄土色	3mm大の砂粒を少し含む。 若干のカンタン石を含む。	施文	
37-8	SK011	縄文土器	**	**	**	**	口縁部以下	良好	外面褐色 内面赤褐色	2mm大の砂粒多い。	外面に大印文施文。 内面に赤褐色。	

F.g.-No.	出土遺構	種別	器形	口径	底径	器高	保存部位	残存率	状況	色	調	胎土	備考
37-9	SPC14	縄文土器		**	**	**	口縁部		良好	外面褐色 内面褐色		1m大の砂粒を少し含む。 ケララン石粒多い。	外面上部ナテ、下部積り文様土器文。 内面上部赤褐色、下部積り文様土器文。 内面 器口部
37-10	SPC14	縄文土器		**	**	**	口縁部(直)		良好	外面赤褐色 内面褐色		1m大の砂粒多い。 ケララン石粒多い。 植物の焼込みあり?	外面赤褐色積り文様土器文。 内面上部赤褐色積り文様土器文、下部ナテ。 内面上部植物焼入り文様土器文(直走り)。
37-11	SPC16	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒多い。 ケララン石粒多い。	外面積り文様土器文(直走り)。
37-13	SX103	縄文土器		**	**	**	口縁部		不具	黄褐色土色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	赤褐色
37-14	SX103	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	積り文(積り文方向不明)
40-20017	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	口縁部		やや良	外面黄褐色 内面黒灰褐色		1m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面上部積り文様土器文、下部ナテ。
40-20023	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	褐色		1m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文(斜走り)。 内面ナテ。
40-30004	周辺表層	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面褐色 内面黄褐色		1m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面ナテ。
40-10459	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面黄褐色		2~3m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文?
40-20021	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文(上縁部)土器文、下部不規則的。
40-10447	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	胴部 (底縁部上)		良好	外面黄褐色 内面赤褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文(斜走り)。 内面ナテ。
40-10607	包含層	縄文土器		**	**	**	胴部		不具	黄褐色土色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文(積り)。 内面黄褐色。
40-20022	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	胴部		やや良	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面ナテ。
40-20020	包含層	縄文土器		**	**	**	胴部		やや良	外面黄褐色 内面黒灰褐色		1m以下の砂粒を少し含む。 植物ケララン石粒を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面ナテ。
40-20019	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	口縁部		良好	黄褐色		2~3m大の砂粒を少し含む。 ケララン石粒が少し見られる。	内外面積り文様土器文(斜走り)。
40-20018	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	口縁部(直)		良好	外面黄褐色 内面黄褐色		1m大の砂粒を少し含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面上部赤褐色土器文、下部ナテ。
40-20016	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 (部分的に無文様段がみられる。)
40-10679	包含層	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	褐色		2~3m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を含む。	外面積り文様土器文。 器の形が不明。
40-10703	包含層	縄文土器		**	(天丸)	**	底縁部		良好	外面褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を少し含む。 内面黄褐色	山形土器文。 ケララン石を少し含む。
41-10575	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部		良好	黄褐色土色		内外面共に観察交換積り文が部分的に見られる。	内外面共に観察交換積り文が部分的に見られる。
41-10450	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部(直)		良好	外面褐色 内面褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を少し含む。	1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を少し含む。
41-10575	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部		良好	黄褐色土色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を少し含む。	内外面共に観察交換積り文が部分的に見られる。
41-10450	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部(直)		良好	外面褐色 内面褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を少し含む。	外面積り文様土器文、内面上部積り文様土器文、下部ナテ。
41-10624	包含層	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面ナテ。
41-10470	包含層	縄文土器		**	**	**	底縁部 (平底)		良好	黄褐色土色		2~3m大の砂粒を多く含む。	外面積り文様土器文、下部積り文様土器文。 内面ナテ。
41-20025	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	口縁部		良好	外面土色(黄褐色) 内面褐色		1m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面上部ナテ文様土器文。 内面上部積り文様土器文、下部ナテ。
41-20030	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	胴部 (器口部下)		良好	外面黄褐色 内面黄褐色		2~3m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を少し含む。	外面積り文様土器文。 内面上部黄褐色土色、全体黄褐色。
41-10452	包含層	縄文土器		**	**	**	胴部		やや良	外面黄褐色 内面赤褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面ナテ。
41-10423	包含層 10424	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面赤褐色		1m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を少し含む。	外面積り文様土器文。 内面ナテ。
41-10252	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部		良好	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を少し含む。	外面積り文様土器文。 内面黄褐色。
41-10476	包含層	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	黄褐色土色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文(積り)。 内面ナテ。
41-10519	包含層	縄文土器		**	**	**	胴部		良好	外面褐色 内面黄褐色		1m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面ナテ。
41-10601 他	包含層	縄文土器	漆鉢	**	**	**	口縁部		良好	外面褐色 内面黄褐色		1m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面上部赤褐色、直下積り文様土器文、下部ナテ。
42-10167	包含層	縄文土器	漆鉢	**	**	**	口縁部		やや良	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を少し含む。 ケララン石を少し含む。	外面積り文様土器文(斜走り)。 内面上部赤褐色土色、全体黄褐色。
42-10566	包含層	縄文土器	漆鉢	**	**	**	口縁部		良好	褐色土色 褐色土色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文(斜走り)。 内面上部赤褐色土色、直下赤褐色土器文、下部ナテ。
43-20024	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	口縁部		良好	外面黒灰褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を少し含む。 ケララン石を多く含む。	外面赤褐色積り文様土器文、下部積り文様土器文、全体黄褐色。
43-10136	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部		やや良	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を少し含む。 植物ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面上部赤褐色土色、全体黄褐色。
43-10017	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部		不具	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒多い。	外面積り文様土器文(積り)。 内面上部赤褐色土色、全体黄褐色。
43-20009	包含層 (SGGr)	縄文土器		**	**	**	口縁部		やや良	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文(積り)。 内面 器口部ナテ。
43-10389	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部		不具	外面黄褐色 内面黄褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文(積り)。 内面上部赤褐色土色、全体黄褐色。
43-10532	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部(直)		良好	黄褐色		1m大の砂粒を多く含む。 ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文。 内面積り文様土器文。
43-10430	包含層	縄文土器		**	**	**	口縁部		良好	外面黄褐色 内面赤褐色		1~2m大の砂粒を多く含む。 植物ケララン石を多く含む。	外面積り文様土器文(斜走り)。 内面積り文様土器文。

Fig.-No.	出土遺物	種類	器種	口径	底径	器高	保存部位	埋存率	産出	色	調	胎	土	備	考
43-20008	瓦合埴 (O4Gr)	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	外周褐色 内面褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部縄文式織文施文。 内面ナデ。口縁部からやや下がついた所に横文織文施文。 内面縄文式織文施文。		
43-20012	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	やや良	暗茶色-黄褐色	2-3mmの大砂粒を多く含む。			外周部縄文式織文施文。 内面織文。		
43-20001	瓦合埴 (S4Gr)	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	褐色 内面淡茶色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 1mmの小砂粒を多く含む。			外周部縄文式織文施文。下部斜紋施文。 内面(全体)赤土織文施文。下部斜紋施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10427	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	外周淡茶色 内面淡茶色	1mmの小砂粒を多く含む。 細粒コラン石粒を多く含む。			外周部縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-20005	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	外周褐色 内面淡茶色	1mmの小砂粒を多く含む。 細粒コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-20004	瓦合埴 (K3Gr)	縄文土器	**	**	**	**	口縁部	良好	外周黄褐色 内面褐色	1-2mmの大砂粒を多く含む。 1mmの小砂粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-20028	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	良好	暗茶色	1mmの小砂粒を多く含む。			外周部縄文式織文施文(横文施文)。内面下部斜紋縄文式織文施文。下部ナデ。		
43-10445	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	良好	外周褐色-茶色 内面黄土色	1mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文(無文部位有)。		
43-10528	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	良好	外周褐色-褐色 内面黄褐色	1-2mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面上部斜紋大縄文式織文施文。下部ナデ。		
43-20011	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	やや良	外周黄褐色 内面黄土色	1mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面上部斜紋大縄文式織文施文。下部ナデ。		
43-10502	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	良好	外周褐色-淡褐色 内面淡茶褐色	1mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。下部ナデ。 横文式織文施文。		
43-20003	瓦合埴 (K2Gr)	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	良好	外周黄褐色 内面黄褐色	1mmの小砂粒を多く含む。 細粒コラン石粒を多く含む。			外周部縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。下部ナデ。		
43-20010	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	良好	外周黄褐色 内面淡褐色	1-2-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文(一部横すり消し)。内面上部斜紋大縄文式織文施文。下部ナデ。		
43-10279	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	黄褐色-灰褐色	2-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文(横紋)。 内面ナデ。		
43-20028	瓦合埴 (K2Gr)	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	良好	外周褐色 内面黄土色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。内面ナデ。 コラン石粒を多く含む。		
43-10561	瓦合埴 (K2Gr)	縄文土器	**	**	**	**	胴部	不良	黄土色-黄褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。内面(全体)赤土織文施文。 コラン石粒を多く含む。		
43-10531	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周褐色 内面淡茶褐色	1-2mmの大砂粒を多く含む。 細粒コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。内面(全体)赤土織文施文。 内面ナデ。		
43-10407	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周褐色 内面黄褐色-黄褐色	2-3mmの大砂粒を多く含む。 内面黄褐色			外周部大縄文式織文施文。内面ナデ。 コラン石粒を多く含む。		
43-10503	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	やや良	外周黄褐色 内面黄褐色	2-3mmの大砂粒を多く含む。 細粒コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10330	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	黄土色-黄褐色	1mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。下部ナデ。		
43-10255	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	淡茶色-黄褐色	5mmの粗い砂粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10437	瓦合埴 魚	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周褐色 内面黄褐色	2-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。内面ナデ。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-20029	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	やや良	外周黄褐色 内面黄褐色-褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面ナデ。		
43-10410	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	やや良	外周黄土色 内面淡茶褐色	1mmの小砂粒を多く含む。 細粒コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10456	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周黄褐色 内面褐色	1mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面ナデ。		
43-10486	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	不良	外周淡茶褐色 内面褐色	1mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			内面(全体)赤土織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10509	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周黄土色-褐色 内面淡茶褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-20031	瓦合埴 (S5Gr)	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	黄土色-淡茶褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。内面(全体)赤土織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10467	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	やや良	外周褐色 内面黄褐色	1-2mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。全体(全体)赤土織文施文。		
43-10520	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周褐色 内面黄褐色	1-2mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文(横紋施し)。内面(全体)赤土織文施文。		
43-10463	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	口縁部直下	良好	外周黄土色 内面褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。下部ナデ。		
43-20004	周辺直採	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周黄土色 内面褐色	1mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10485	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周黄褐色 内面黄褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文(斜紋施文)。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10522	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	黄土色-淡黄土色	1mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文(横紋施し)。内面(全体)赤土織文施文。 コラン石粒をわずかに含む。内面ナデ。		
43-10231	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	淡茶褐色-黄褐色	3mmの小砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文(横紋施し)。内面ナデ。		
43-20014	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	やや良	外周淡褐色 内面黄褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面ナデ。		
43-20002	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周黄褐色 内面黄褐色	1mmの小砂粒を多く含む。 細粒コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。全体(全体)赤土織文施文。		
43-20032	瓦合埴 (T5Gr)	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	黄土色	1-2mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面ナデ(横紋施し)。		
43-10445	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周褐色 内面黄褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面ナデ。		
43-20013	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周黄褐色 内面黄褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。 内面(全体)赤土織文施文。		
43-10481	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	不良	外周黄土色 内面黄褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			上部斜紋。外周部大縄文式織文施文。下部斜紋。内面ナデ。全体(全体)赤土織文施文。		
43-20001	周辺直採	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周褐色-赤褐色 内面褐色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			上部斜紋。外周部大縄文式織文施文。下部斜紋。内面ナデ。		
43-10565	瓦合埴	縄文土器	**	**	**	**	胴部	良好	外周黄褐色-淡茶褐色 内面黄土色	1-3mmの大砂粒を多く含む。 コラン石粒を多く含む。			外周部大縄文式織文施文。内面ナデ。 内面(全体)赤土織文施文。		



Fig. No.	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	保存部位	残存率	構成	色調	胎土	備考
49-1046F	包合層	縄文土器	段	**	**	**	胴部					
51-30010	周辺表層	弥生土器	甕	**	**	**	口縁部		良好	外面黄褐色 内面灰褐色	1m大の砂粒を多く含む。 微細なカンラン石粒を多く含む。	外面陶文跡見出し。 内面ナデ。
51-30008	周辺表層	弥生土器	甕	**	**	**	底部		良好	淡赤褐色	1m大の砂粒を多く含む。	磨滅。
51-30009	周辺表層	弥生土器	甕	**	**	**	底部		良好	赤褐色	1-2m大の砂粒を多く含む。	外面磨滅。内面ナデ。
51-30011	周辺表層	弥生土器	高坏	**	**	**	坏底部		良好	赤褐色	2m大の砂粒を少し含む。	磨滅。
51-30012	周辺表層	土師器	钵	**	**	**	把手		良好	黄褐色	種点	
51-30013	周辺表層	土師器	钵	**	**	**	胴部		良好	赤褐色	種点	
51-30014	周辺表層	土師器	皿	**	**	**	底		良好	黄褐色	種点	種点
51-30014	周辺表層	土師器	皿	**	5.0	**	底		良好	淡褐色	種点	種点
51-30015	周辺表層	土師器	皿	9.8	7.0	2.1	底		良好	淡褐色	種点	種点
SK012	縄文土器	甕	**	**	**	**	胴部		不具	黄褐色	1m大の砂粒多い カンラン石粒多量含む。	砂粒粒を若干量含む。

Tab.7 志西野々遺跡出土石器一覧表

Fig. No.	出土遺構	器種	保存状態	石材	重さ	時代	Fig. No.	出土遺構	器種	保存状態	石材	重さ	時代
29-14	SK007	有蓋 甕	完形	徳島県燧石			49-30014	周辺表層	有蓋 甕	完形のみ	平通明礫燧石		
29-17	SK007	二次加工銅片	完形	徳島県燧石			49-10233	包合層	銅片(石部:胴部)	完形	サマカイト		
32-1	SK009	三角 鏃	先端欠損	サマカイト			49-30022	周辺表層	銅片(石部:胴部)	完形	サマカイト		
36-4	SK080	細石 鏃	完形	黒曜石			49-10390	包合層	銅片(石部:胴部)	完形	白色チャート		
37-1	SK090	二次加工銅片(漆部)	完形	サマカイト			49-10091	包合層	銅片(石部:漆器)	完形	サマカイト		
37-12	SP015	二次加工銅片	欠損	サマカイト			50-30017	周辺表層	銅片(石部:胴部)	完形	サマカイト		
49-30017	包合層 SK010	丸蓋 甕	欠損	サマカイト			50-30021	周辺表層	二次加工銅片	完形	徳島県燧石		
49-30028	周辺表層	三角 鏃	片羽欠損	サマカイト			50-10420	包合層	二次加工銅片	完形	平通明礫燧石		
49-10417	包合層	三角 鏃	完形	徳島県燧石			50-10481	包合層	石 鏃	完形	サマカイト		
49-20019	包合層	細石 鏃	完形	サマカイト			50-30030	周辺表層	二次加工銅片	完形	平通明礫燧石		
49-10441	包合層	有蓋 甕	完形	黄色チャート			50-30019	周辺表層	銅片(石部:胴部)	完形	黒曜石		
49-10149	包合層	有蓋 甕	片羽欠損	平通明礫燧石			50-10704	包合層	銅片(石部:漆器)	完形	赤褐色チャート		
49-30006	周辺表層	有蓋 甕	片羽欠損	徳島県燧石			50-10442	包合層	二次加工銅片	完形	黒曜石		
49-30017	周辺表層	有蓋 甕	完形	平通明礫燧石			50-10582	包合層	銅片(漆部:漆器)	欠損	徳島県燧石		
49-20040	包合層	有蓋 甕	片羽欠損	平通明礫燧石			50-10600	包合層	二次加工銅片	完形	平通明礫燧石		
49-30015	周辺表層	有蓋 甕	片羽のみ	平通明礫燧石			50-20038	包合層	銅片(漆部:漆器)	欠損	黒曜石		
49-30023	周辺表層	有蓋 甕	片羽のみ	徳島県燧石									

Tab.8 志前田遺跡出土石器一覧表

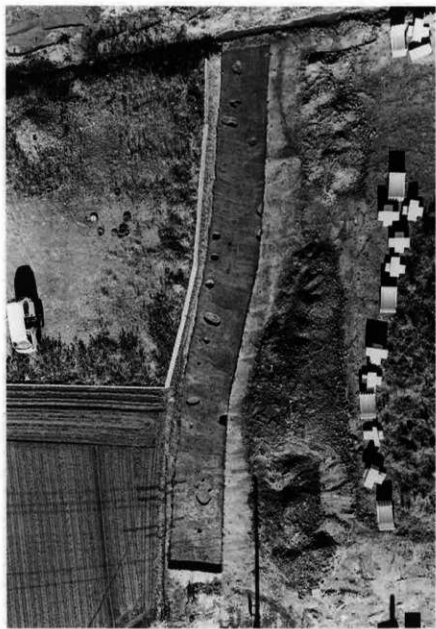
Fig. No.	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	保存部位	残存率	構成	色調	胎土	備考
60-1	SK101	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		良好	外面赤褐色 内面灰褐色	1m大の砂粒を多く含む。 カンラン石粒を多く含む。	外面陶文跡見出し。 内面ナデ。
60-2	SK103	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面灰褐色	1m大の砂粒。石灰質。黒曜石 粒。カンラン石粒などが少量含む。	外面陶文跡見出し。 内面ナデ。
60-3	SK106	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		良好	外面黄土-黄褐色 内面黄褐色	微細砂粒。カンラン石粒を含む。	外面陶文跡見出し。 内面ナデ。
60-1	SK203	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		やや	淡黄褐色	1m大の砂粒を多く含む。 カンラン石粒をわずかに含む。	外面磨滅。内面ナデ。
60-2	SK204	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		良好	淡褐色	2m大の砂粒を多く含む。	外面磨滅。内面磨滅。
60-3	SK204	縄文土器	甕	**	**	**	口縁部		良好	外面淡褐色 内面黄土色	1-4m大の砂粒を多く含む。 内面上部陶文跡見出し。 ナデナデ。	外面陶文跡見出し。 ナデナデ。
60-1	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面黄褐色	2m大の砂粒を少し含む。 微細なカンラン石粒を多く含む。	外面陶文跡見出し。内面磨滅。
60-2	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		不具	外面黄土色 内面褐色	2-4m大の砂粒を多く含む。 微細なカンラン石粒を多く含む。	外面陶文跡見出し。内面磨滅。
60-3	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		やや	外面赤褐色 内面赤褐色-黄土色	1-2m大の砂粒を多く含む。 カンラン石を少し含む。	外面陶文跡見出し。内面ナデ。
60-4	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		不具	外面黄褐色 内面黄褐色	2-4m大の砂粒を少し含む。 微細なカンラン石粒を多く含む。	外面陶文跡見出し。磨滅しい。 内面ナデ。
60-5	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		不具	外面黄土-黄褐色 内面黄褐色-黄土色	1-3m大の砂粒を多く含む。 カンラン石粒を多く含む。	外面陶文跡見出し。内面磨滅。
60-6	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面黄褐色-淡褐色	2m大の砂粒を多く含む。	外面陶文跡見出し。内面磨滅。
60-7	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		不具	黄土色	3m大の砂粒を多く含む。 カンラン石をわずかに含む。	外面陶文跡見出し。全体に磨滅。
60-8	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	口縁部		やや	外面黄褐色 内面灰褐色	2m大の砂粒を多く含む。 カンラン石粒を多く含む。	外面磨滅。内面ナデ。
60-9	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		良好	外面赤褐色 内面赤褐色	1m大の砂粒を少し含む。	外面磨滅。内面ナデ。
60-10	周辺表層	縄文土器	甕	**	**	**	胴部		良好	外面黄褐色 内面赤褐色	1-2m大の砂粒を少し含む。 カンラン石粒を多く含む。	外面磨滅。内面ナデ。
66-11	周辺表層	土師器	甕	**	**	**	底部		良好	赤褐色	種点	
66-12	周辺表層	土師器	甕	9.0	7.0	1.5	1/6		良好	淡黄褐色	種点	外面ナデ。内面ハナジ。磨滅部土器付 底面ホヤ切り。
66-13	周辺表層	陶器	甕	**	**	**	底部		やや	外面赤褐色 内面黒色釉	種点	底面ホヤ切り。磨滅部土器付。輪内 部のみ。

Tab.9 志前田遺跡出土石器一覧表

Fig. No.	出土遺構	器種	保存状態	石材	重さ	時代	Fig. No.	出土遺構	器種	保存状態	石材	重さ	時代
60-4	SK205	土師 鏃	完形	徳島県燧石			67-2	周辺表層	有蓋 甕	完形	灰色黒燧石		
67-1	周辺表層	三角 鏃	完形	徳島県燧石			67-3	周辺表層	銅片 鏃	完形	平通明礫燧石		



# 図版



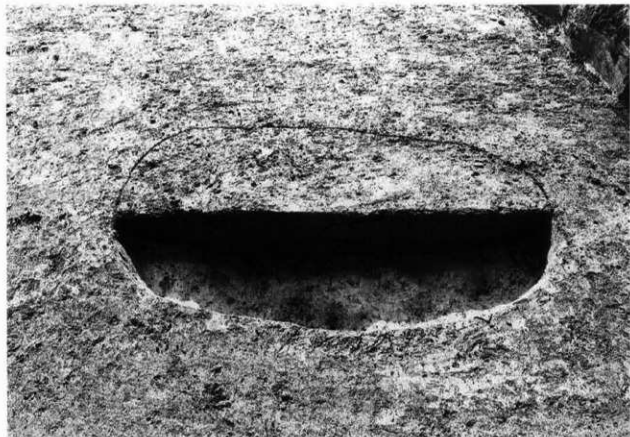
常用野中遺跡 全景（上から）



常用野中遺跡 SK01土層断面 (北カ5)



常用野中遺跡 SK01完備状況 (西カ5)



常用野中遺跡 SK02土層断面（北から）



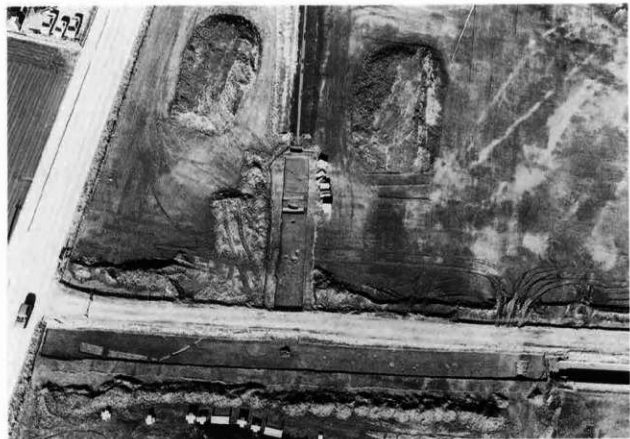
常用野中遺跡 SK02完掘状況（西から）



常用野中遺跡 SK03土層断面（北から）



常用野中遺跡 SK03完塞状況（西から）



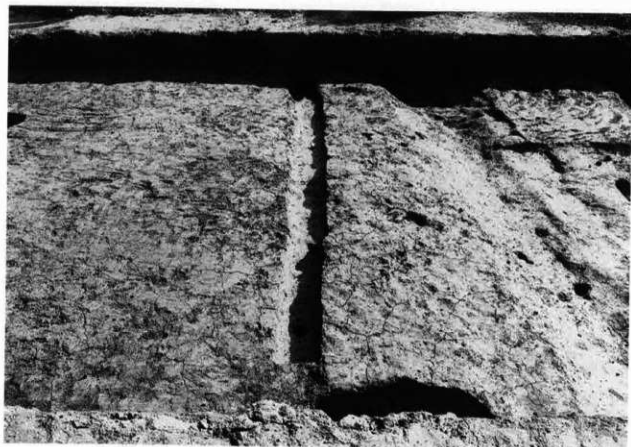
志下綿計遺跡 第1次調査区 全景 (上から)



志下綿計遺跡 第1次調査区 SD01・02・03 (上から)



志下埴計遺跡 第1調査区 SD01土層断面 (西から)



志下埴計遺跡 第1調査区 SD01完掘状況 (西から)



志下埴計遺跡 第1次調査区 SD02土層断面 (西から)



志下埴計遺跡 第1次調査区 SD02完掘状況 (西から)



志下埴計遺跡 第1次調査区 SD03掘断面 (西から)



志下埴計遺跡 第1次調査区 SD03完掘状況 (西から)





志下婦計遺跡 第1次調査区 SD05・06完掘状況（北から）



志下婦計遺跡 第1次調査区 SD07.SK08完掘状況（北から）



志下埴計遺跡 第1次調査区 SD09完掘状況 (北から)



志下埴計遺跡 第1次調査区 SD10完掘状況 (西から)

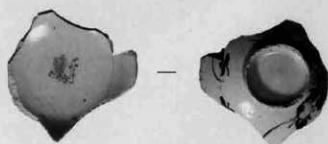


Fig. 12-1



Fig. 12-2



Fig. 15-1

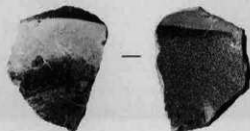


Fig. 14



Fig. 16-2

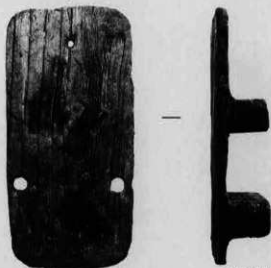


Fig. 12-3



Fig. 17



志下婦計遺跡 第2次調査区 全景 (東から)

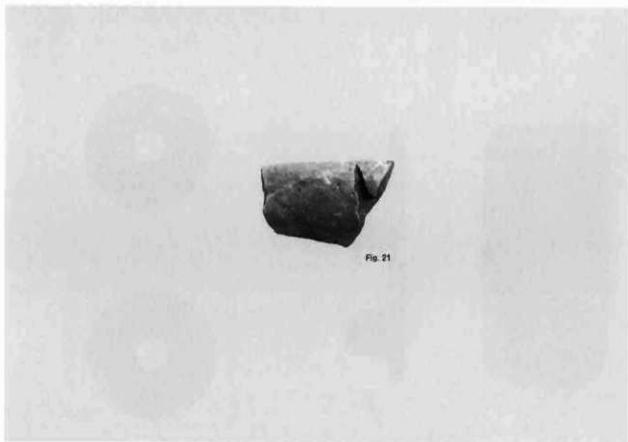


Fig. 21

志下婦計遺跡 第2次調査区 周辺採集遺物



志西野々遺跡 全景 (上から)



志西野々遺跡 全景 (東から)



志西野々遺跡 西側調査区 全景 (上から)



志西野々遺跡 SD01土層断面（北から）



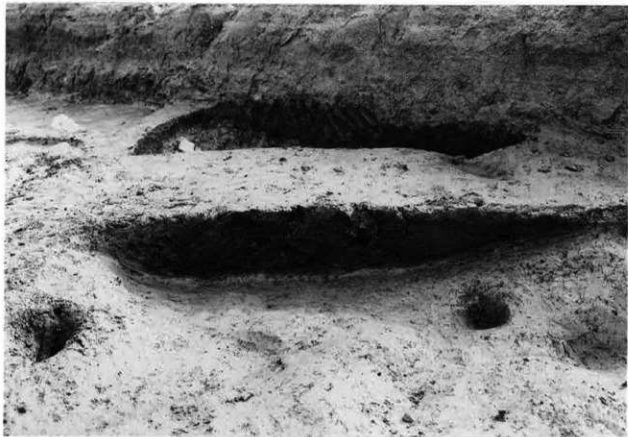
志西野々遺跡 SD01完掘状況（北から）



志西野々遺跡 東側調査区 全景 (上から)



志西野々遺跡 縄文遺物包含層 (上から)



志西野々遺跡 SD005土層断面（北から）



志西野々遺跡 SD007土層断面（北から）





志西野々遺跡 SE006完掘状況（北から）



志西野々遺跡 SK009完掘状況（北から）

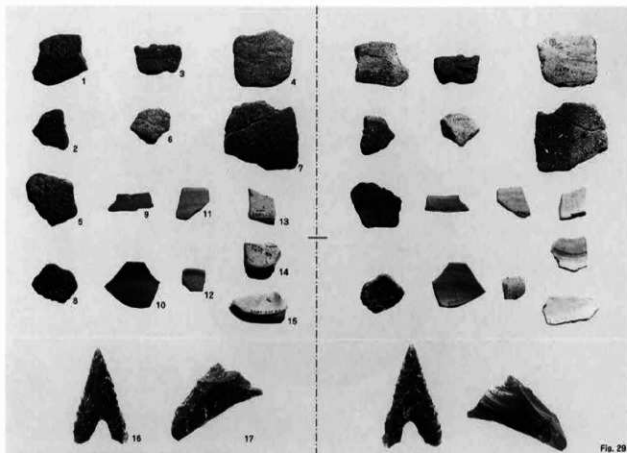


Fig. 29

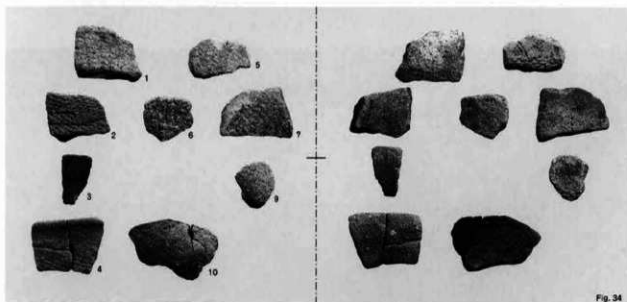


Fig. 34

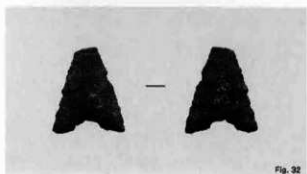


Fig. 32

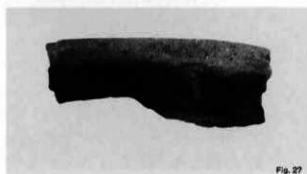


Fig. 27

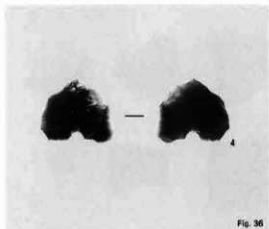
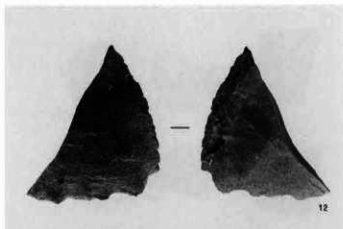


Fig. 36



12

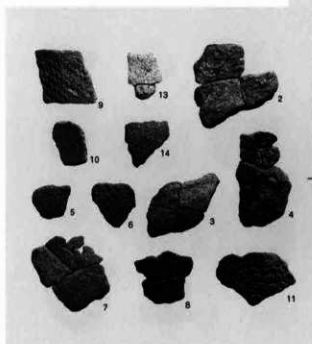


Fig. 37

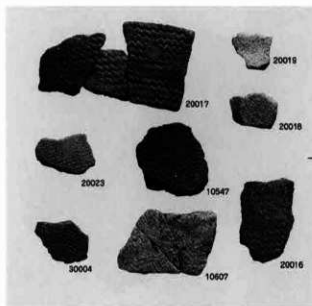


Fig. 40

志西野々遺跡 出土遺物 (2)

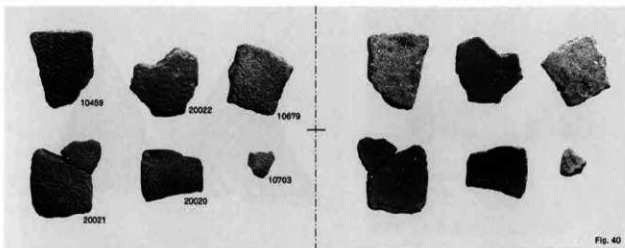


Fig. 40

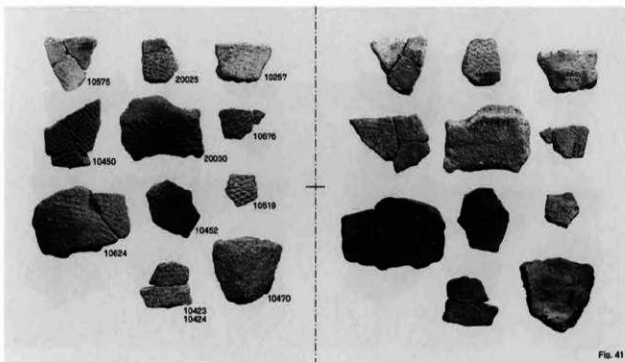
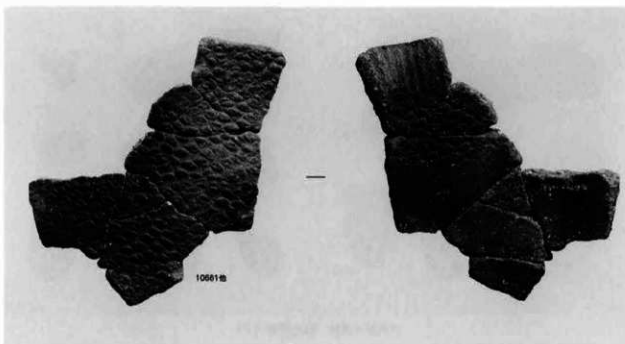


Fig. 41



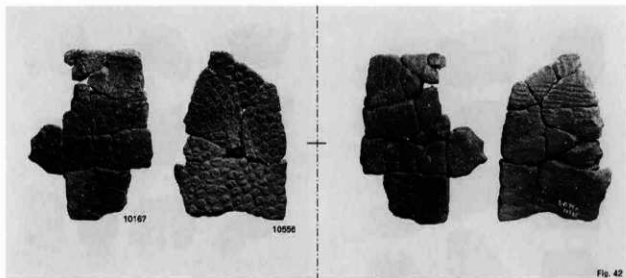


Fig. 42

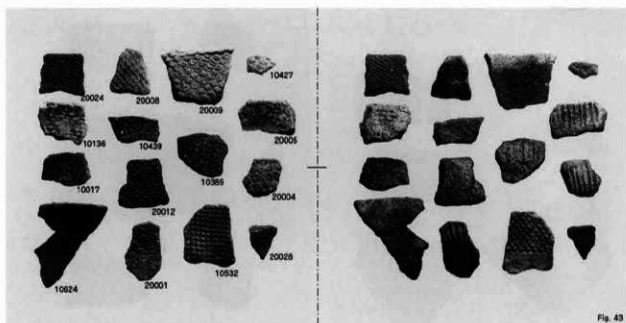


Fig. 43

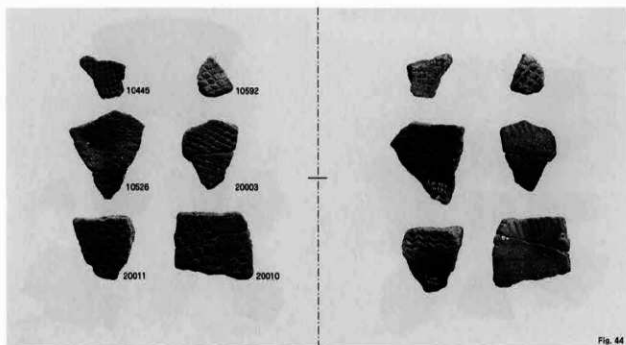


Fig. 44

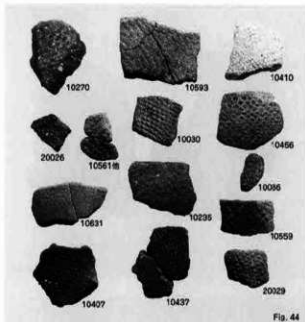


Fig. 44

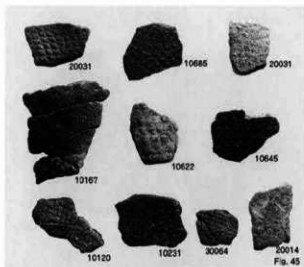


Fig. 45

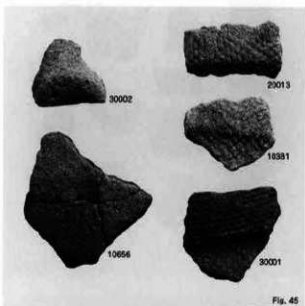


Fig. 45

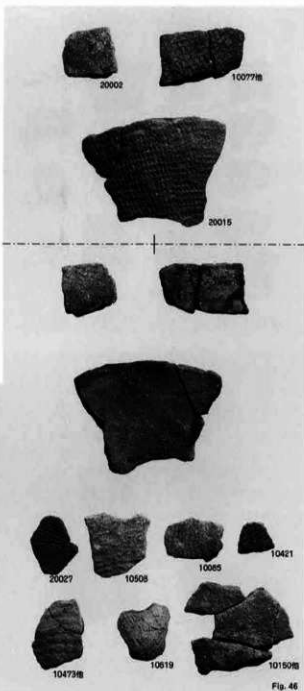


Fig. 46

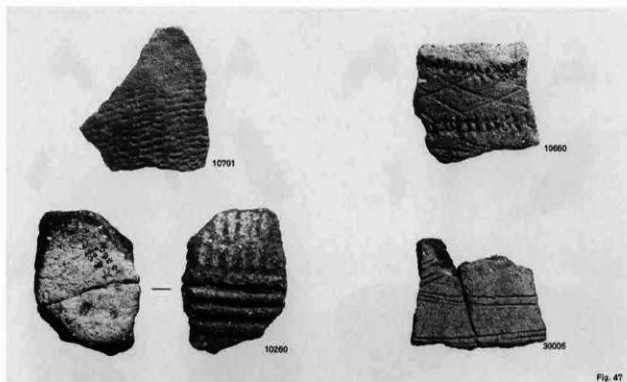


Fig. 47

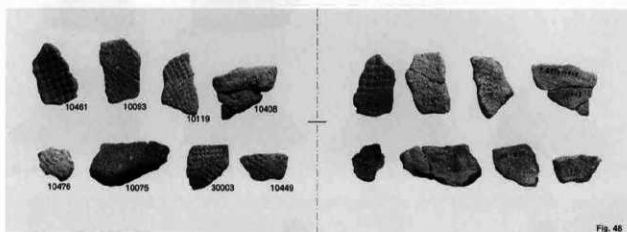


Fig. 48

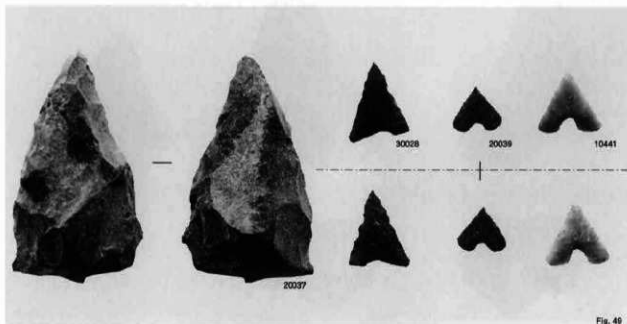


Fig. 49

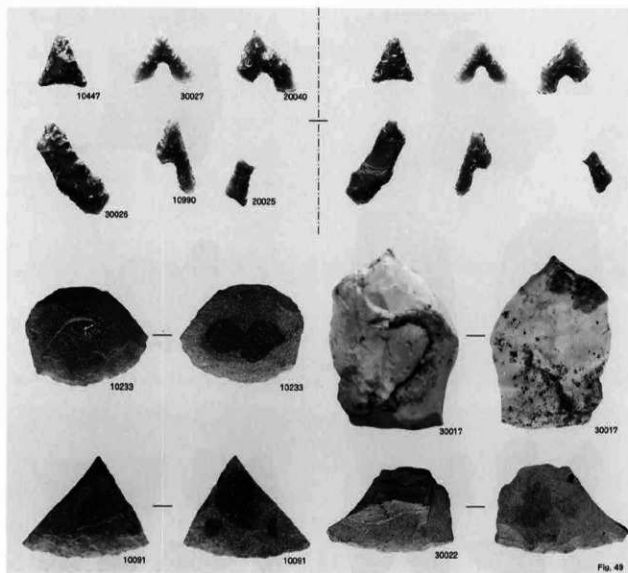


Fig. 49

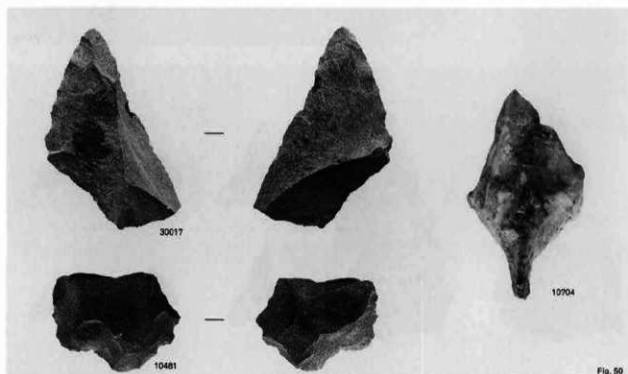
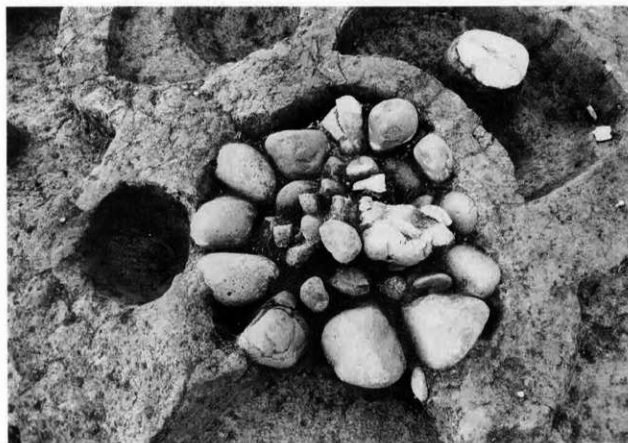


Fig. 50





志前田遺跡 SD01土層断面 (南から)



志前田遺跡 1号炉 (SK104) 石材投入状況 (南から)



志前田遺跡 1号炉 (SK104) (南東から)



志前田遺跡 2号炉 (SK205) (南から)

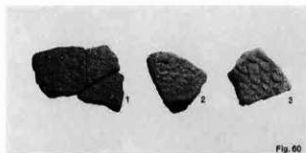


Fig. 60



Fig. 65

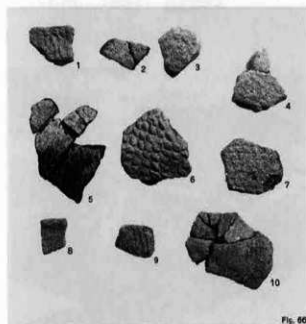
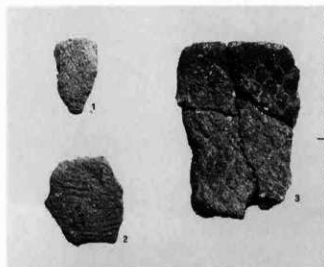


Fig. 68

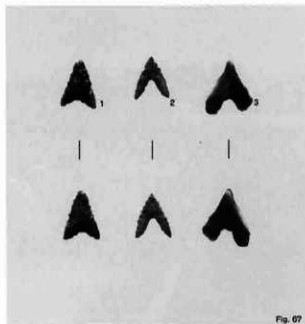


Fig. 67

志前田遺跡 出土遺跡



志前田遺跡 1号炉取り上げ作業状況①



志前田遺跡 1号炉取り上げ作業状況②



志前田遺跡 1号炉取り上げ作業状況①



志前田遺跡 1号炉取り上げ作業状況②



志前田遺跡 1号炉取り上げ作業状況③



志前田遺跡 1号炉取り上げ作業状況④



志前田遺跡 1号炉取り上げ作業状況⑤



志前田遺跡 1号炉取り上げ作業状況⑥

**筑後西部第2地区遺跡群(Ⅲ)**

筑後市文化財調査報告書  
第27集

平成12年年 3月31日

発行 筑後市教育委員会  
筑後市大字山ノ井898

印刷 瞬報社写真印刷株式会社  
福岡市中央区天神5丁目4番16号城戸ビル3F  
TEL 092-712-2241